甲午戰役

第拾貳編

# 新文林

下卷

大和田建樹著

東京 博文館藏版

新文林

下八国長崎之部

大和田建樹

版畫書圖
東京博文館

大和田建樹著

# 新文林

下卷

東京　博文館藏版

大和田建樹著

# 新文林

下卷

東京博文館藏版

# 新文林下卷目次

## 孤燈


大宮……一
友千鳥三集の序……二
友千鳥四集の序……四
雪ふれり……五
富士……五
十六日の朝……七
雪燈籠……八
にくきもの……八
名所圖繪……九
玉乘……一〇
都築花守翁……一〇
闘牛……一一
鍋燒うどん……一二
歸る子供……一二
豆腐屋……一三
箏の音……一四
拳人形……一四
しだれ櫻……一五
雛市……一六
梅を折る……一六
喇叭の聲……一七
椿……一七
古寺……一八
雨……一八
火の用心……一九
東雲……二〇
客待つ車……二〇
雨のあした……二一
猿……二一
横濱道……二二
南京鼠……二二
間に合はせ藝……二三
燕雀いづくんぞ……二三
久しぶりの散歩……二四
火事あと……二四
これやまさらん……二五
五月五日……二六
鯛鯉……二六
萩の苗……二七
金魚池……二七
唯夢の如し……二八
裸体の人物……二八
棺一つ……二九
「檜垣」の能……二九

なほ頼もし……三三
米の粉細工……三三
小兒朝のつとめ……三四
櫻の實……三五
雨ばれぬ……三五
小川町……三六
雨もまたよし……三七
戒名の字……三八
音羽ふじ子……三九
豌豆……四〇
さまゝの世……四〇
苗賣……四一
ぬれあるく少女……四二
一愛相……四三
瞿麥二鉢……四三
若竹……四四
東儀彭質君……四五
念佛坂上……四五
蚊屋……四六
相似たり……四六
ごぜう賣……四七
二坪の庭……四八
夏の朝……四九
花語らず……五〇
大和瞿麥……五一
速記家……五一
正誤取消……五三
虫干……五四
秋近し……五五
名のよしあし……五五
栗……五六
附藥……五七
源氏豆……五八
崇拜と嫌忌……四六
後世の歌人……四六
薩摩芋……四七
二時……四八
日本雅曲集の序……四八
水くゞり……四九
土筆……五〇
春の雪……五一
花賣る翁……五一
小主人……五三
少女……五四
夜半……五五
風烈し……五五
空あかし……五六
雀……五七
春の朝……五七
墨田川……五八





無情の梵字……五八
庄原氏の幼女……五九
野外の春風……五九
古寺……六〇
彼岸櫻……六一
花時の雨……六一
夕ぐれ……六一
淺草公園……六二
赤城の通……六四
堀端……六五
友の不在……六五
義太夫文粹の序……六六
植ゑたる櫻……六七
歌舞伎座……六七
小金井……六八
落花……七〇
春の月……七〇
一損一得……七一
藤棚の下……七一
目黒……七二
村又村……七二
根殼の花……七三
上野の塔……七三
運動會……七三
暮春の花……七四
初覆盆子……七五
網するも時……七六
亀井戸天神……七六
田圃の道……七七
日は長し……七七
新晴……七七
初旅……七八
瞿秋……七九
亂鐘……八〇
父の墓……八〇
まぐろ……八一
夏菊……八一
堀切……八二
新著の草稿……八四
蚊軍……八四
夏の虫……八五
不忍池畔……八六
老木の陰……八六
海水浴……八七
十二叢……八八
芋田樂……八八
向島……八九
萩ちる……九〇
花屋敷……九一
花作る僧……九一

萩は……九二
美術展覽會……九二
父子……九三
謠曲訓蒙圖繪の序……九三
二つの鴨……九五
大久保彦左衛門……九六
氷柱……九七
田舍寺……九七
食後の散歩……九八
千金……九八
躑躅園……九八
若葉見……九九
東照宮……九九
筧の水
柴人……一一〇
舊宅……一一〇
大原女……一一二
小兒の貝ひろふ袋に……一一二
草枕
花見の旅……一一九
片瀨の波……一五五
ぬけまわり……一六五
辨天堂……一〇〇
養蠶する家……一〇〇
月の大きさ……一〇一
鎌倉の嵐……一〇一
鶴岡……一〇二
頼朝の墓……一〇三
長谷の大佛……一〇三
權五郎の社……一〇四
一車夫……一〇五
忙中の閑……一〇五
久米幹文翁……一〇六
我目を食ふ……一〇八
大勝利……一〇八
夕立……一一三
浦の夕……一一四
浦の朝……一一七
富士川舟……一八〇
鹿隈川……二〇四

新文林下卷目次終



# 新文林下卷

大和田建樹　著

## 孤燈

### 大宮

暮に殘しつる書きものを携へて。一月二日大宮に遊ぶ。遊ぶ家は氷川明神の奥。松まばらに薄白き所にあり。南の一室をしめてまづ浴みす。湯あたゝかにて世の塵さへ洗ひすてつべし。鳥なぞ煮させて飯もをへつ。机を窓近くよせて筆くはへつゝうち向ふに。松の落葉をふみありく小鳥の聲。はや友となりぬ。

いつしか夜はふけ行くに。音なふ物とては戸を打つ嵐と鐵瓶の松風のみ。都ならば御寶々々と呼び行くも今頃ならん。なぞ思へ

ばいと淋し。書き散らしの紙取り集めて枕に着く。歌をやよまん初夢をや見ん。

戸を開けば霜白し。かすみながらにさしそむる朝日はかなたの梢にあり。例のまづ浴みして神社の境内を散歩す。蓮の莖のみ枯れたてるが。池のこゝかしこに氷り殘れるも見ゆ。小鳥は聲々に此森彼森と遊びめぐる。我耳も目も富みたり。今日執る筆のゆくへこそ樂しけれ。

## 友千鳥三集の序

（舊作を序でに載す）

歌よみ習ふ人に種々あり。交際のためにするもあり。人もするから我もせんとてするもあり。これらはうれぞといふ目的なけれど。なほ入るに去たがひて味のいづる事もあるべし。わが心ならねど人にすゝめられ。父母に命せられてはじむるものは。あしくせば一時の役目稽古に止まりて。或ひはやみなん。殊にあやぶまるゝは少女子たちぞかし。父母もいかでものにしてしがなとひたすらにうちたのみ。みづからも專ら此わざをと執心ふかくいそしむほどに。一たびよるべ定まりて家もつ身となりぬれば。きのふまで机の上に去たしみつる古今集もいつしか窓の塵にうづもれはてぬ。あはれ世の中いかくもありけるかなゝどかくは問はゞをつとの好まぬ道なればともいふらん。くりやの政の去げゝればともいふらん。されど猶志のさだまらぬに外ならじとぞ思ふ。歌はもとよりあつもの作る材料にもあらず。飯あたゝむる薪にもあらず。これを得んとて歌にかふるゝ出仕いそがしくなれりとて庭の花をほりすつるにやたとふべき。わが敎うくる少女子たちよ。すべての學問もさにこそあれ。

# 友千鳥四集の序

弓射るに的あり。よく中つるを上手とす。琴彈くに譜あり。之に熟せば達者なるべし。さてわがよむ歌は如何に。的あれども知らず。譜あれども知らず。たゞ矢を放し糸を鳴らすたぐひこそ多けれ。さるからに香川景樹翁を信ずる人は神の如く尊み。信せぬ人は惡魔の如く忌む。忌む人は翁が歌道を乱したる罪を責め。尊む人は翁が歌道を改良せし功を稱す。功と云ひ罪と云ひ。かゝる大家を我心にまかせて毀譽するは。歌道の定義なき故ならずや。西洋の學問には定義たちたれば。おのが負最々々の品評こそあれ。功と罪とを混雜する如き相違はいまだあらず。我國のいにしへは彼國の如き學理めきたる事こそなけれど。おのづから的をあやまる類いあらざりけらし。今は理嵐に泥む世の中なれば。古言古意はめづらしからずとて俗言俗意をつらねつゝ新調なりと誇





る人あり。歌は改良すべきものならずとてかたくなに萬葉古今を守るもあり。いかにせば此氷と炭とを結びつけて同じく蒸發せしむる機を得べき。我論はいはず。此集を讀む人は知る事もあらん。

## 雪ふれり

雪ふれり。萩山吹などの枯枝にかゝりてゆら〳〵と動きたる。いと美し。穂もなき薄の古葉をうづめたるも捨てがたし。霜よけ藁に胡粉など散らしたるやうなるも。竹垣のさきに帽子のやうに高く積れるも。とり〴〵に興あり。まだ跡つくる客は來らず。礫しつべき書生はかへらず。

## 富士

いと幼かりし頃。富士の夢を三度見たりとよろこびて母上に語りたれば。それは見たし〳〵と思ふからなり。めでたきいはれにいあらずとのたまひし事。昨日今日のやうあり。

十七の年始めて東京にのぼるとて。東海道の空に仰ぎそめたる姿は畫となりて腦裡に殘れり。その時。

およばじと云ふ言の葉のほかぞなき
朝日かゞやく雪の富士の嶺

とよみつ。二十二の年再び東海道をのぼるとて。

そことしもふもとの野邊はわかなくに
まづしらみゆく雪のふじの嶺

などよみたる頃。ます〳〵此山を愛する心はまされり。父上伴ひて舟路を來つる日。遠州洋にて雲の末より白き膚あらはしつるを。われに富士がと敎へまゐらせし事もありき。小石川の金富町





に住みける頃は。我書齋の窓より居ながらにうち向はるれば。朝日のまへ夕日の後など。なつかしくもこひしくもおもしろくもあはれにも見られしなり。

わすれぬは一昨年の春。伊豆の修善寺を立ちて沼津に出づる道に。菜種の咲きつゞきたる末より見あげしけしきは。幼時の想像のかけて及びし處ならんや。

諺にいふ。富士に一度のぼらぬも愚か。二度のぼるも愚かと。おのれはおろかならぬ處にまで達したれば。此上に何をか望まん。幼時の夢なりし高嶺はすでに現の友となりぬ。されどたゞ現なりしは上の生涯が夢とかはりはてたるこそかなしけれ。

## 十六日の朝

二子の仕着せ小倉の帶。いかばかりのよろこびをつゝみてか歸

るらん。父も無事なり母も無事なり。主人の首尾もあしからず。番頭のきげんもいとめでたし。苦しまぬ身はいかでか知らん。一月十六日の朝の心を。

## 雪燈籠

竹なるを掻きおとすもあり。水汲む道をつくるもあり。おとなゞものゝ忙がゝしさを見まねに。雪はらはんとて小兒まで勇みたつ。われも交りて雪燈籠一つ造り出でたり。これは雪を塔の如く積み上げて。油さしたるこよりを縦横に貫ぬき。兩側より火をつけて穴の中に燃え行くを見はやす事なり。をりにふれて昔にかへる心なきにあらず。

よくきものの





朝起きて物書かんとするに硯こほりて筆動かず。湯をさして墨をすれば。暫しこそあれ又かたへよりこほり行きて。ぽろ〳〵と筆の穂先にかたまりつく。いとわびしく。ふものにたかる蠅。眠たき耳おそふ蚊。にくきものはあまたあれど。これ程にはおもはず。

## 名所圖繪

子供遊ばせつゝ暖き日なたなどにて名所圖繪見るこう樂しけれ。あるは春日よ菜を摘む少女。あるは汐干に蛤ほる童。ゐながらに千里の友を得たる心地するもうれしゝ。ばゝにひげ剃らするぢゝいあれば。かたへには碓につながれたる赤子あり。まもり札受くるとて寺に集ふ人の中にゝ。杖つきたる翁に一つわけてやる仁者もあり。見れば見るまに〳〵樂しみきゝまりなし。子供は祭の畫を見出だして御輿よ提灯よとさわぐ。

## 玉乘

淺草公園地にて玉乘といふものを見たり。十五六の娘をかしらにて。七八人の女のわらはころがる玉に足ふみとめつゝ廣き舞臺をうちめぐるさま。あぶなげもなし。よそめにい樂しからんと見れど。乘る身にはわびしくやあらん。わびしからんと見れど。樂しくやあらん。世の中皆然り。

## 都築花守翁

都築花守といふ翁は。おのが十七八の頃親しく行きかひて教へを受けたる事も少なからざりしに。翁は齡を忘れて後輩のわれを好友とさへ立てられたり。ある時うち連れて大超寺奥といふ所の山川に莚しかせて花見せし事もありき。ほろ〳〵と散るは





盃に浮かび流に舞ひて春風雪の如し。翁も我も歌多くよみたれど今い記臆になし。

## 鬪牛

故郷にては。秋祭の祝などに牛たゝかはせて遊ぶを農夫どもの上なき樂しみとす。牛もてる人々はこれに出ださんとて。前かたより草をかひ肉をあたへ。當日は赤や白やと腹帶美しくかざりたてゝ。人中せましと引きいづるを。屠所の羊とはかはりて。もう〳〵と聲たつるもまづいさまし。廣き川原にて一つがひづゝ合はする事なれば。見る人黒山の如く兩岸にみちて。樹を攀ぢ藪をわけなどして。ひいき〳〵に罵りあふ。牛には名ありて『稻妻』『獨樂』などいふい。其働によるなるべし。ずは勝ちぬと云ふ時おそし。負けたる牛は崩るゝ人を突きのけて何處までもと逃げ行くを。

追ひとめんとして田の中にまろぶもあり。勝ちたる方は褒美の紙包を兩の角にうづたかく結び付けて。人前をかなたこなたと連れめぐる。牛も心よからん。持主も心よからんひきかへて彼逃げたる牛追ひとめし人の心まで思ひやる人はあらじ。明日は代議士の撰擧日とぞいふ。くらべらるゝ事なきにしもあらず。

## 鍋焼うどん

月いよ〳〵白うして寒風肌を裂くが如し。四つ辻にごろ荷おろして火をはたきたつる商人あり。鍋焼うどんとぞ呼びたつる。家路に向ふ車夫にかあらん。かはり待つ間もわびしげよて立てり。かゝる世わたりもありけり。

## 歸る子供

寒雲地に低れて落ちくるものを見れば霰なり。三人四人と手をひきつれつゝ學校の子供は歸り來る。彼の心い春なるべし。彼の望みいつぼみなるべし。北風肌を裂かば裂け。かしこには見送る良敎師あり。此方には待ちむかふる慈父母あり。

## 豆腐屋

雪一夜降りあかしたるに今朝もやまず。わらぢにこほりつきたるを拂ひもあへずいそがしげよ賣りあるくは。豆腐屋なり。注文にまかせて縱横に切れば忽ち『やつこ』となる。湯豆腐とやならん。汁の實にや入るべき。下婢はもち去りぬ。荷ははや横町に折れて。燒豆腐油揚をさへ賣りつくしぬ。雪なほ胡粉を散らして笠をゞ埋む。ひるも賣れなん夕べも賣れなん。

妻も子も力あはせてひく豆の

細き煙や雪にたつらん

## 箏の音

小雨しづかに降る日。本郷の丸山を通りしに。若葉の奥より箏のしらべ聞こえしがいと身にしみて。あはれかゝる所に住みていつか此樂しみをなぞ思ひしは。書生の昔なりき。得らるゝ今はさほどに思はず。

## 拳人形

三月とて子どもらのならべ行くものゝ中に。げん人形といふあり。くる〳〵まはして其顔のむきたる人が白酒をのむさだめなり。此人形は茶釜をかたげゐたりといへど。わが小兒の時すでに欠けてあらざりき。其頃扇を片手に持ちゐたれど。いつの間にか





とれてなし。無情の人形も變遷よもれぬ世にこそありけれ。ゑまひうるはしく向ひ給ひし祖母上母上。今は何處ぞ。彼が袖にこぼれかゝりし故郷の春風も。今は誰が盃をか吹くらん。されど昔の友は唯汝のみ。

## しだれ櫻

故郷の庭にしだれ櫻の大木ありて。高き岸より斜に生ひ下りて軒をおほへり。三月の節句には木蔭にむしろをしきて雛遊びなどせし事。今も忘れず。十ばかりの頃なりけん。手習よりかへり來たるに。いつしか形い失せて切くひを殘せり。なげゝど如何にせん。老い朽ちて危ければと父上の給ふを。この切くひさへ今は人の物になりぬ。童遊びに弓ひき鞠うちなどせしはすべて此木陰なりしを。

## 雛市

高き所にい内裏雛さらやかに昔を思はせたり。緋の袴の官女白張の仕丁など添ふもあり。猩々慈童西王母いづれも能のいでたちして我おとらじと見ゆ。此外今やう人形の罪なげなる。有職姿のあてやかなる。燈にひかりあひて目もおよばず。かくの如き店おもなるが十あるとて十軒店とよぶ。入る人出づる人。買ふ人見る人。山の如く潮の如し。買はれたる雛。口あらばいふべし。友は雲上の春に醉ひ。われは田舍人の肩にかゝり行く。貧富貴賤の常なきは人のみならずと。

## 梅を折る

墓に手向けんとて梅を折る。散れどなほ風にあてじとこそすな





れ。花筒の水かたへより漏れども。更に柄杓してぞつぎもて行く。あゝ人の世もかくなりけり。

## 喇叭の聲

月しづかなる夜に喇叭の聲を聞く。思ひ出づれば今は昔し。わが師範學校の生徒引き連れ旅行せし頃。曉の夢を破りしも是なりき。夕べのつかれをなぐさめしも是なりき。鎌倉の霜朝千葉の朧夜。かれも夢これも亦夢。

## 椿

山路を埋めて椿の散りたるいとうれし。五重の塔ともいふらんやうに。竹の枝などにさしあつむるもあり。目白といふ鳥に甘き汁を吸いせんとて拾ひかへるもあり。枝ながら取らんとて木に

のぼりたるは。散らさじとて草深き上に心して投げ落すを。取りあげつゝ苔をかぞふるもあり。我故郷は山近ければかゝる遊びこそ常なりしか。

## 古寺

卒都婆は垣となり。石碑い橋となりてぞ仆れふす。木魚のひゞくを聞けば無住の寺にもあらざるべし。世の榮花にほこるものは古寺の様を知らぬにやあらん。

## 雨

垣根の蕗の薹など生ひ出づる頃。しづかに降る雨いとうれしし。晴れなば土筆摘みにもと思ふこそ更に樂しけれ。花より後の木がくれにほと〳〵と軒うつ音を聞く。おはれ深し。芍藥などの重げ





ようつぶしたる。うれさへにくゝもあらず。秋の雨を何にかたとへん。萩散りかゝる水の上に大きくも小さくも紋をゑがきてそゝぐ様よ。燕のかすめとぶ様にも似たるかな。笛ほのかに聞こゆ。詩人の筆をや待つらん。冬は茶山花の花をこぼして風交じりに降る。猶趣きあり。埋火起して幼稚園より歸る子を待つ一つは心にかゝれど。

## 火の用心

おのれ近火にあひたる當坐い鐘聞くごとに胸さわぎせり。今年になりて四月もたゝぬに車よりおつる事すでに三度。此頃は車に乘るも厭はるゝ如し。たゞこの恐れをおちぬ前にもたん人もがな。議事堂燒けたり。にはかに火の用心せしとてもはや及バず。

## 東雲

わが曾祖父は横笛をふき給へり。其手ならし給ひし笛の名は東雲とて。年に一度は土藏よりいだして虫干する事なりしかば。童ごゝろに見覺えて二三十年もたゝば。いつはわがものゝなならん。などぞ思ひしおもはざりき。夜のまに藏をぬけいでゝゐたらんとは。世は何事もこれなりけり。今は誰が手に觸れて落梅の風に吹かるらん。

## 客待つ車

犬の聲とほく近く聞こえて月霜の如し。人ぞはり絶えて鍋燒うどんのあんどんのみかすかに見ゆ。歸らんか今宵いまだ米買ふに足らず。なほ待たんか提灯の蠟も盡きぬんとす。あはれ月ならで歸り車に乘らん客もがな。





## 雨のあした

山吹の莟豆のやうなるに白露美しくかゝれり。霜よけを取りおくれしが爲め。秋草は芽まだ短かけれど綠いろゝ濡れたる。これも捨てがたし。歌おもはるゝ雨のあしたかな。

## 猿

猿かふものゝあり。公園や神社や人集まる所には鎖につなぎならべて婦女子の來るをぞ待つ。此猿は藝させんとにはあらず。芋人參などを客にあたへらるゝをたべて見するのみなり。つまらぬ事よといへば。かたへの一人がさな笑ひそ。人間も天國に行かば猶猿のたぐひならんと。

## 横濱道

横濱に行く事ありぞまづ新橋のさわぎもすみて品川の海きたる。安房上總の遠山かすみて景色よし。鈴森の松原。八景園の梅林。送りむかへて橋一つとゞろきわたれば川崎となる。これよりおもしろからぬ田舍道にて眠を催す頃。神奈川灣はれやかにうちむかはる。月に一度二度すぐる道ながら飽きもせず。讀書するにも似たり。文書くにも似たり。

## 南京鼠

夜店に南京鼠を二つ箱に入れて賣り居たるを見る。絶えず車をまはす趣向にておもしろければ。小兒のみやげに求め歸りしに。よろこぶ事限りなし。小兒も永く遊ばん友と思ひけん。鼠も別れんものとは思はざりしならん。いつのまにか二つが嚙み合ひて





共に死し居たり。食には不足もかけざりしものを。あさましきは畜生なり。庭に埋めて木を建て。之に歌一首かきつく。

同じ根にかへればうらむ聲もなし
空にたゝかふ花のはる風

## 間に合はせ藝

伶人は京都奈良天王寺の三派に分れ。能役者は觀世寶生金春金剛喜多の五流にゝらみ合ひて。互に家傳を張り藝道をたゝかはしつゝ戰國に異ならざりしは。德川時代の昔なりき。今はうち和して助け合いんとするはよき事ながら。戰場に出づる心を忘れて。間に合はせ藝に流れ行かんとす。何事も又しかなり。

## 燕雀いづくんぞ

漢學先生あり。常に俗客をうるさがりて留守をつかふ。新參の下婢其心を知らずして名刺を取り次ぎたるに。先生怒る事甚し。下婢は負債多き家なりと見とめて急に暇を乞ひ去りぬ。先生はじめて悟り。燕雀いづくんぞ。なぞゝや呻きけん。

## 久しぶりの散歩

久しぶりに散歩せんとて家をいづるゑ。足重く腰いたくて五六町も進まぬ内にはや疲れぬ。されどなほ心をはげまし行く程に。十五町二十町も來たれば。はじめのつかれを忘れたる如し。あゝ何事もこれなりけり。稽古ぎらひの藝人が舞臺のみにてうまく出來る筈のあるべしや。

## 火事あと

手桶ゑにぎり飯添へて持てるもあれば。泥にまみれ煤に染まりて立てるもあり。見舞に行く人。てつだひに行く人。織るが如く縫ふが如し。さしも立ちならびたる町屋どもは時の間の灰となりて。赤き瓦と焦げたる礎を殘すのみ。恐ろしきはかぐづちのあらびぞかし。昨夜一時過より小川町に火起りたるが。あけても消えず。からうじて晝頃しづまりたれど。猶下火は燃えくひの柱を傳ひて。やゝもすれば遠くも走らんとす。煉瓦づくりのまどめきて廣野に立つもあはれなり。わが家のあたりにや煙の中にものさがしあるくもあはれなり。かれもこれも如何に夢の心地のみすらんげにも目前の人界。唯さむる事の遲速あるのみ。

## これやまさらん

活版屋火事にあひて。わがあづけつる著述の草稿を三四十枚も

焼きたり。又かゝん事のつらさを何にかたとへん。旅路に日くれて足すゝまず。道に迷ひて二三里も跡もどりせねば里に出でずといふに似たるかな。かれやまさらん。これやまさらん。

## 五月五日

鯉は十分にふくらみ。矢車は心地よく風にまはれり。男子ある家のよろこび如何ならん。われも菖蒲湯つかひて金魚の池に遊ぶを見る。いと樂し。

## 鯛鯉

鯛は鱠につくるべし。鯉い汁にすべし。然れども三つ葉山椒なくては鯛鯉も用をなさず。



## 萩の苗

庭にもとより生ひたる萩あり。植木屋より苗を買ひ來てうゑたる萩あり。もとよりのは已に四五寸ものびたるに。植木屋のいわづかに二寸程なり。秋の色は知らず。うつす事の生長を妨ぐるはかくの如し。此頃小兒は赤城の幼稚園卒れりとて。同じ所の小學校にやせん。他にやかへんとの論あり。萩の若葉は忠告しがほにうちそよぐ。

## 金魚池

水しづかにて浮べる麩は月の如し。金魚は口をひらきつゝこれにあつまれば。麩は車の如くにまいり笠の如くに傾く。小兒の樂しみ得ていふべからず。

## 唯夢の如し

おのれ廣島英語學校に在りし日。同じ校門を出入せし友百に越えたり。而して此友今何處にかある。時としては新聞に著書の廣告を見。政黨の演說に連名あるを讀みて。其職業の定まりしをよろこぶ事あれど。猶まれなり。彼運動時間にロビンソンの算術書もてつどひたる海棠の陰は。今も芝生綠に春風吹きわたるや否や。教員の大村氏は逝けり。受付の千田氏も逝けり。十五六年間の日月人事は唯夢の如し。

## 裸体の人物

ある畫師いふ。裸体の人物をかくに足が一番大事なりと。顏は勿論なれどよく出來れば人もほめて其功あらはるゝに。足はよしとてもほめられず。惡しとては笑はるゝむつかしさを謂ふなるべし。歌にも文にも此足の如き難所あり。役者の藝にも之あらん。政治家の術にも之あらん。

## 棺一つ

棺一つを五人の人數送り來る。寺にて待ちうけたるもわづかに三人のみ。其佛は何ぞと問へば生前は世に用ひられし歌人なり。弟子あれども來らず。同學多けれども來らず。まして他の知己をや。樂しみを共にすれども哀しみをば同じうせずとは。眼前の人情なり。あはれ。

## 『檜垣』の能

五月十五日には『檜垣』ありとて。假にも能の道に心よする人は口々に言ひさわぐ。或はめづらしき能なればと曰ひ。或は重き習ひ

の能なればと曰ひ。名に驚かさるゝもの。人に促さるゝもの。數を知らず。そも〳〵此能は太夫の家にて一代に一度もするかせぬかと云ふ程のものにて。近くは明和年中に片山惣助が京都にてせし後は絶えてなかりしを。此度梅若實が一世の名人としてつとむる事なれば。世を動かしたるもうべなり。況んや近年は道成寺と云ひ望月石橋と云ひ。殆んど出ぬ月もなき程に番組の競爭はげしき時節なれば。見る人の望が頂上に達したるも一の原因なるべし。

おのれはいまだ檜垣の能に出あひし事あらず。されば目に觸れたる過去の影ゝいまだなし。唯未來の影を想像して前夜ゝ謠本に向ふ。水汲む處はとやあらん。舞まふさまはかくやあらんと。思ひやるもまづ樂し。

當日になりぬ。檜垣の番にもなりぬ。囃子方三人長上下にて坐に





着きたり。いづれも當時の上手まづ舞臺を靜めたるに。笛ひゞきて僧出づ。身ゝはや寂寞の鄕に入るが如し。棧敷は扇づかひの音を殘して聲もせず。鼓につれて白髮仙顏の老女やう〳〵に出で來り。右手には水桶を提げて。杖を力に休みては又歩む。末野の薄の傾きながらも猶打ちまねく心地す。僧と問答の末ほのかに其名をあらはして消え失せし跡にゝ。地謠あれども見わず。囃子方あれども聞えず。岩戸の山おろしに吹かれて僧の立てるを見とむるのみ。

御法の聲草陰にとゞきて。再びあらはれたる姿は庵にあり。白妙の衣。水色の袴。なほおとろへぬは古の色香なるべし。釣瓶を取らんとすれば月水にあり。影をや碎かん。釣瓶をや引かん。檜垣にすがる老女の外にゝ實もなし。舞臺もなし。水にうつるおもかげ。我か人か。

立ちて舞へば足弱けれど猶かろく。かへす袖毎に昔をおもはせて。波なき水に鳥のおくらるゝにも似たり。風なき空に花のたゞよふにも似たり。榮ゑし春を訪はんとすれば。聲なき涙の答へ顏なるも夢ならず。いつしか終りぬ。老女も見えず僧も見ゑず。庵も失せぬ。檜垣も消えぬ。はじめて我に歸りたる如し。上手の藝こそ不思議なれ。かたへに人ありて。いづこがおもしろかりしと問ふ。おのれ曰く。すべてなり。世の批評家などに評せしめば。甲は前がよかりしともいはん。乙は後が妙なり。舞はことさらになどもいふらん。されどこれゝ。山水の畫を見て岩がよし橋がよしといふたぐひにて。其岩橋のよきは流のよきが爲なりとは。彼知らずやあらん。能にゝ能毎にむつかしき點おほし。それを難なくしたりとて見物人はほめず。若し之を仕損せば見物人ゝ口々にそしるべし。されば此一二時間の內目前に檜垣の嫗ゐるを思ひて實ゐ





るを忘れしめしが。即ち檜垣の妙所なり。其餘ゝ問ふべき事かはといへば。げにもとて止みぬ。あはれ此稀なる檜垣の時節にあひしも。思へば此道に名人の出でたる惠みなるかな。

## なほ頼もし

車夫たふれたり。我身おちたり。怪我せずやと問へば。旦那こそと答ふ。人情なほ頼もし。彼は我の無事なるをよろこび。我も彼の幸福なるを賀す。

## 米の粉細工

米の粉をもて犬猫菓物何によらず即坐につくりて賣りあるく商人あり。自ら天下に二人ある其一人なりとほこる。げにも小兒の貰ひたるを見れば桃林檎金柑など附木の上に作りたるが。色

から形からまがふべくもなし。二三日たちて桃二つに破れたるを見れば。種まで赤く出來ゐたり。上手の業は人見ぬ所にまで及びたるを。はじめて知りぬ。

## 小兒朝のつとめ

わが肩にかゝりつゝ近き寺に遊ぶを。小兒朝毎のつとめとす。蜘蛛の巣かけたる狐格子さしのぞきて石佛拜む顏。いとうれしげなり。うしろの野邊には日まだあたらず。小笹の末より南京玉などのやうに垂れかゝる露を指にうけては。蝸牛の居たるに驚くをりもあり。猫にやるとて穗の出でたる草を摘む時もあり。

## 櫻の實

櫻の實は小指のさき程の大きさにて薄紅なるに。露縫ひとめたる蜘蛛の糸いと美し。小學校の戸いまだ開かず。家にある生徒は今や枕をはなるらん。

## 雨はれぬ

雨はれぬ。夏めきわたりぬ。子供は麥藁の帽子すゞしげにかぶれり。少女の袖かろきに紅の帶したるは。若葉に殘花の趣あり。花賣る翁い氷店に荷をおろせり。杜若の頃にもなれるかな。

## 小川町

神田小川町の通い。新しき軒をならべて賣る人買ふ人いとゑましげなり。思へば此地なりけるよ。猛火につゝまれて一朝の灰と化し去りしは。猶三十日の過去なるに。今いはや忘れたる如し。燒けたる二三日い何とかいひけん。移り易きは人情なるべし。

## 雨もまたよし

小兒ども連れて江の島に遊ばんとせしに。道より雨降り出でたれば。せん方なく芝の海水浴にとゞまる事に定む。海に臨める處にて。居ながらに見渡すけしき。まづ小兒の心にかなへり。櫓をおして漕ぎ行く舟。羽をならべて飛び立つ鳥。あれよ〳〵といはぬものなし。雨間を見ては渚におり。實もなき貝を拾ひあつめなどしてはよろこぶ。あつらへたる肴來りぬ。木の芽の時節は去りて摘み添へたる柚の花ひとり膳にかをれり。雨もまたよし。書くべきものなど携へたらば。さらによかるべきに。

## 戒名の字

わが叔母なりし人の戒名を春光華榮童女とぞいふ。まだ幼くて失せ給ひしかば。おはれなりし事ども。母君は常に語り給へり。病みふし給ひし御顏の上に涙のかゝれる樣など思ひよそへられて。御名の文字こそ身にしむなれ。名によりて感じをうながすもの世には少なからぬを。これはまして。

## 音羽ふじ子

谷中の何某寺を過ぐ。雨少しこぼれて若葉の濡れたるもあはれなり。思へば此寺よ。わが友なりし音羽ふじ子の永く眠れるは。彼人女子師範學校の生徒たりし日は。入學より卒業に至るまで一番の席順を讓る事なかりしと聞く。近き頃は我敎を受けて文學にも志厚かりしに。天なるかな。肺病といふ惡魔こそ此良敎師を奪ひつれ。一掬の水一枝の花。たれか墓前をなぐさむらん。

## 豌豆

豌豆を飯にたき入るゝ事あり。おのが好物なるを知りて。家のものぞも其時節になれば必ず調じ出づるを例とす。母君まだ世におはしゝ日の事なるが。或時歌の會にとて急ぎ出で行くを呼びとめて。いま釜をおろしたれば暖きを一つとて。自づから杓子取りつゝすゝめ給ひしをりもありしよと思ふに。かゝる味は再びかへらず。

## さま〳〵の世

梅雨に入りぬ。鐘うち鳴らして飴賣り歩く商人も見えず。涼しき陰に屋臺をすゑて餅燒きゐたる老婆も見えず。貧しき身には如何に無情の空なるらん。若葉の奥には筑紫琴ほの〴〵聞ゆ。世い





## 苗賣

雨間待ち得て苗賣きたる。藤豆胡瓜小豆の苗と呼ぶもあれば。かぼちやに瓢單おしろいの苗と稱ふるもありて。さま〳〵なり。之を植ゑて垣につる卷かせたる時の心地いかならん。まして花をも實をも見初めしよろこび思ふべし。やよ待て翁。われも三つ四つかはん。

## ぬれあるく少女

露うつくしき草の原を濡れ歩るく少女は十三四なるべし。カナリヤの餌をや摘みに來つらん。兎の朝けや尋ねに來つらん。殘月はわかれて松にあり。

## 一愛相

子をだいてくる老婆あり。手ふりにて行く娘あり。彼は子を負はんとするに能はず。一手かしてと頼めば。見知らぬ人ながら娘い親切に負いせてやる。これのみにてもあるべきに。口もて子供に一愛相おくりて別れ行きぬ。世わたりの秘傳は唯これよ。

## 瞿麥二鉢

客去りて夜は更けそめたり。宗柏寺の縁日とて小兒は風車まはしつゝ母と歸り來れば。おのれも植木かはんとて居殘りの下婢など連れて行く。かんざし店などやう〳〵しまひかけたるに。瞿麥二鉢人待ち顔なり。赤きもよし白きもあしからず。

## 若竹

風にも靡かぬ程の若竹いとめでたし。月のさはりよもまたならず。蚊の住家にもまだならず。青物市にはこばるゝ時い過ぎて。花筒に切られん時はいまだ來らず。

## 東儀彭質君

式部寮の伶官たりし東儀彭質君いわが雅樂の師なり。久しく音づれもせで過しつるに。思はざりき。かへらぬ旅立のしらせを得んとは。就きて學びし事ほとんど三年。自ら書きて授けられつる『扳頭』の譜は今も座右の本箱にあり。秘藏をわけて惠まれたる黒檀の筆筥函は長く師恩と共にいたゞきもてるものを。あはれ夢の如き世の中なるかな。

柩を送りて谷中の天王寺に至りぬ。内君い兒かき抱きつゝ棺を守り。令嬢いおとゞひ手を引き連れて鬢の亂れもかきあへぬ樣。

讀經の聲松風の音。諸行無常の響きならぬはなし。わが師と頼みそめたる日。かゝる別のあらんとい夢にも知らざりしものを。

## 念佛坂上

市谷の奥念佛坂の上に住みたる事あり。其頃は父君まだ達者におはして。散歩の歸さに休み給ひし木陰など思ひ出づるも。いとなつかし。水野の原といふが近きにあれば。春雨の後など土筆尋ねに行きては土くさき手して歸りし事も常なり。大久保も遠からず。谷町にくだりて少し行けばこぶ寺といふがありて。食後のそゞろ歩きにはよく行きたり。隣の菊作る翁は今もすこやかなりや。垣の晝顔はつぼみもつ頃なるべし。

## 蚊屋

蚊屋程うるさきものなし。枕もとに硯引き寄せものかゝんとするに。燈をそとに置けば暗く。内に入るればあぶなく。首を出だしてすれば蚊にくはれて何も出來ず。唯心地よきはさし入る月をながめて團扇鳴らす夜半のみ。

## 相似たり

朝顔は竹垣にまきつかんとしてまだとゞかず。小學終りし兒童の頃なり。萩は勢よく茂り榮ゑて露を宿しぬ。徵兵年齡や來にけらし。桔梗女郎花の秋近きは。良緣を待つ少女やにあらん。瓜ひとり花を見せたるは。魁してめでられんとする人の類ひなるべし。

## ぞせう賣

日は天に中して午睡夢たけなはなり。ぞせう賣は厨の方に呼び

こまれてわづらに汗をぬぐふ。右手に庖刀を取り。左手につかみいだして骨を抜きつゝ。身の浮沈。魚の豐凶など語る。身をおはふ一枚の竹の子笠。この下にこそ一家三口の生命いおほはるゝならめ。

## 二坪の庭

書齋の南おもてに簾の寐臺をすゑて。朝起くるすないち之にもたれ新聞を見る。心まづさわやかなり。垣根の朝顔昨日は空色なりしが。今朝は薄紫も交りて咲きたり。遠く箱根大磯ともいはじ。夏の朝の樂しみ。近く二坪の庭にあり。

## 夏の朝

子供は下婢と共に金魚池かふるとて跣足にて働く。厨には瓜切る音水流す音。朝のまうけはいとゝいさまし。われも曉よりはじめたる校合終りたれば。本の虫ぼしに取りかゝらん。風まだひやゝかにて朝日藪を離れず。

## 花語らず

例の翁の賣りに來たる百合を瓶にさして机のそばに置く。花は白地にべにの點をさしたるが。四輪は開きて莟のかず猶四五日の望みを充たせり。花語らず我もいはず。樂しみは此不言の内にあり。

## 大和瞿麥

向島の花屋敷より移しうゑたる大和瞿麥三つ四つ咲き初めたり。蝶の羽根の如きうす紅の花ひらめき働く樣。かの市にならべ

たる石竹の類ひならず。さても和文學者が好む花のをかしさよと。笑ふ人もあるべけれど。

## 速記家

速記術に妙を得し人の噂をするとて。或人の曰く。彼は集議院に雇はれて最高給を得たりしが。いつも演説の終る三十分ほど前には必ず書きあぐるなりと。

## 正誤取消

著者の氣がすむのみにて讀者に功なきは本の終の正誤。出でたる爲めに却りて評判のひろまるは新聞の取消。

## 虫干

本の虫干するとて坐敷にひろぐれば。小兒は見まねに桃太郎の本など持ち出でゝならべたり。樟腦の袋を槌にて打てば。又もや振鼓もて机をたゝく。おもしろき人界かな。

## 秋近し

月の色秋近し。氷賣る少女は商ひなきをかこち。虫賣る翁は我時なるをよろこぶ。夜更けて家に歸るに按摩の笛きのふよりは身にしむ心地す。

## 名よしあし

日ぐらしの鳴く頃。垣根に開く烏瓜の花いとすゞし。藪からしもおのづからなる趣あり。されども名の風雅ならぬため歌人の筆にはいまだのぼらず。名のよしあしをいふは人間のみと思ひし

を。

## 栗

殘暑々々とはいへど。夕風すゞしきは秋のしるしなるべし。燈火身にしむ好時節とはなりぬ。軒に聲しておつるを見れば栗なり。燒かれん恐れもまだなければ。人さゝん惡心もまだもたじ。

## 附藥

腫物いでたりとて醫者より附藥もらひて來たるに。一二度ほどにてはや直れり。誰か腫物はいでずやといひては笑ふ。此頃謠の註かくとて本文を人に寫させたるに。能見る時ゝ永くもがなと思はれし松風俊寛のたぐひまで。一枚にても短かれと思はるゝといひたる。さても勝手なるゝ人の心なり。





## 源氏豆

大坂より京都に來る汽車に。田舍女の乳飲子をかゝへたるが同室に乘り合ひたり。山崎にかゝる頃。提げたる袋の紐うちときて源氏豆を一つかみづゝ人々に配りたるが。丁稚僧侶書生よりはじめて我にも及べり。平等一樣なる此贈物の如きは。世に稀なるべしとぞ思ふ。

## 崇拜と嫌忌

先年京都に遊びて西陣の機織場を見んと乞ひたるに。西洋人にさへ許さぬとて斷られたり。此頃ある紀行を見しに。日光の名勝は西洋人にさへ賞美せらるゝと書けり。外國崇拜の極度といふべし。甲博士は西洋人の質問を辭して。外國人に日本の記錄を示す

べからずといひ乙學者は西洋風の文法を悉く教育上より退けんと論じたり。外國嫌忌の頂上といふべし。獨乙のビスマルク氏は外國語より導かれたる言語を交へずして自傳を書かせたりと聞けど。政治家ならぬ文學者の學ぶべきには非ず。

## 後世の歌人

三日月を弓張といひ滿月を鏡にたとへしは。弓を常に馴らし丸き鏡を人々の用ひし時の言葉なり。花を雲に見なし紅葉を錦にまがふるは古今の別なけれど。あまりいひなれて既に讀者を感せしむる能はざるが如し。新ならんとすれば奇にたちいり。穩ならんとすれば言ひふるしたる言となれるを如何せん。後世の歌人ころういとかたけれ。







## 薩摩芋

時計は三時を打ちぬ。芋燒く釜を取りまきて女ども市をなしぬ。東京八百八町の芋屋にて此時刻の賣高れびたゝしきものなるべし。價低くして其味の美なる。貧家も天の惠みに洩れざるゝ唯是のみ。されど都ゝ猶おごれり。我田舍にては之を米にかへて三度の食にかふるものを。

## 二時

霰はさら〳〵と軒をうつ。時計を見れば二時なり。書をすてゝ眠らんか。日課いまだ終らず。なほ進まんか。火鉢は消ゑて灰白し。此時の心を知るものは。明滅の寒燈と斷續の鐘聲のみ。

## 日本雅曲集の序

客去り茶冷えて日はまだ長きに寐ころびつゝ書棚を探れど適意の書なし。この時の無聊いかにぞや。景色も見飽きて眠たくなりたる滊車の内に。カバンを取れば中は讀みふるしの新聞のみ。此時の徒然いかにぞや。細かき文字は見えねど。火を燈すには早し。かゝる夕べに庭の木陰を逍遙しつゝ。星をあかりに讀むべき書はそも〳〵何かある。夢さめて時計を數ふれば二時なり。竹の夜風耳にふれて寐んすれど寐られず。今や消えのこる火影に目さめて我を慰むるは誰ぞ。小説といふもあらん。隨筆と答ふるもあらん。詩集歌選もその數に漏るべきものならんや。中にも歌曲の誦し易く吟じよきものに於てをや。大宮兄のこの編あるこそうれしけれ。今よりは旅人のカバンも空虛なるを恨まじ。閑窓の書棚も主人に捨てらるゝをかこたじ。蝶くるひ花舞ふ春風の前に琴とる美人は。書中の佳調を口にしつゝ柱をや立つらん。書中の作は若草の陰にひろげられて。待たねど雅客の寵をぞ得らん。さても想像おほきは日本雅曲集の未來なるのみ。

## 水くゞり

寒風肌を劈く日。子どもをつれて淺草奥山に女の水くゞりする藝を見たり。わかき女ども三人いで來り。身をさかさまにして水に飛び入り。或い魚をつかみ。客の投げたる烏目を探りなどして出で。又い乳だけある水の中を水盛りたる桶いたゞきつれて。美音聲に歌うたひあるくなど。子どもの目にはめづらしとも見るべし。われらの心には身もふるふ如く。不愉快限なし。世の新奇なる事業企つるもの。十の八九はこの類なるに。不愉快をとなへながら見物の群集するも亦奇なり。

## 土筆

柳は芽をまだ見せねど。何となく重げになびきわたれり。暮るれば月ほそく霞みて。もはや雪も來るまじとぞおもふ。土筆つむべき田圃はこゝぞかしこぞと。子どもを相手にかぞふるもたのし。子どもはれんげつみに去年ゆきし事などかたる。

## 春の雪

春ながらちらつき來れり。ふくらみたる梅もうもれぬ。頭もたげし薺もかくれぬ。見るまに胡粉もて松も鳥居も色どられたり。だゞをしむ筧の雪は三つ四つ音たつるを。犬の足跡はこゝかしこ土の色を見せたるをされど火桶を撫でつゝながめわたすにはは興あり。





## 花賣る翁

花賣る翁は荷をすゑたり。桃の紅白なる。連翹の黄なる。春雨のめぐみ至らぬ色なし。翁は剪をおきて枝を揃へつゝさしいだす。少女は受けとりて小枝を背中の乳兒にわたす。

## 小主人

桃花のいろ草餅の香。雛段に滿ちていとなつかし。子どもは友だちをつゞへて手のひらの如き膳わんに向ふ。小主人すゝむれば小賓客こたへて。興たけなはなり。一瓶の白酒ゝおとなどもをもかはるゞ醉はせて。春いよ〳〵深し。

## 少女

猫は眠れり鶯はうたへり。少女は肱つきぬひかけて立ちたり。棚

の草双紙をやさがすらん。一絃琴をや取り出だすらん。日い長し友は來らず。

## 夜半

星は針の如き光をちらして藪にあたれり。犬の聲と水の響とを除けば何ものも耳にさはらず。さても終日議院に舌を戰はしつる勇士。いまごろはいかなる夢をか見る。閑窓に筆もてあそぶ弱卒は。なほ歌の下の句に苦しみつゝあるを。

## 風烈し

風烈し。砂煙空に滿ちぬ。學校がへりの少女は裙吹きあげられて一處に躊躇し。奪はれし帽子を追ひかくる老人は風伯になぶらるゝ如く。遠くに近くに引きずられゆく。松のたわむ音。戸のひしめく音。なほしづまらずして日も暮れぬ。何とぞ此上に火の事のなかれかし。





## 空あかし

火事よ〳〵とさわぐ。出でゝみれば畑は雲にうつれり。鐘はまだ鳴らず。この風なれば燒くるならんといふもあり。雪のうちゆゑ消ゆべしとかたるもあり。風いよ〳〵わろし。空いよ〳〵あかし。鐘すでに遠くより傳はりて近くに來れり。いづくなるらん。巡査の派出所は人山をなす。

## 雀

簷目のあたらしき庭に。紅葉の如き跡あまた見ゆ。子どもは米をもち來てこゝ〳〵と呼べば。又あつまりてついばみあるく。雀に

も富みたる宿かな。

## 春の朝

鶯しきりに鳴くは。うしろの藪なるべし。起きいづる頃は春の霜なかば消えて。日影はや庭にあり。寐ごゝちのよき頃にもあれるかな。豆腐うる聲は今ぞ門をすぐる。

## 墨田川

向河岸の燈火は星に似たり。やゝ近く流星めきて走るものは川蒸氣の下りゆくなり。墨田川春なほ淺し。皷のしらべは絃聲に和して柳橋の邊に聞ゆ。

## 無情の梵字





苦むす石塔の下には何人の夢をか埋むらん。夕日あたゝかに霞むところ。嫁菜つむ少女も見ゐたり。春ふかし。少女の歌は音樂の如くひゞけども。無情の梵字は寂として答へず。

## 庄原氏の幼女

朝日にかゞやきて五色にみえし花の露は。鶯に踏みれとされて忽ち跡もなし。人の世も之に似たるかな。庄原氏の幼女。六つの齡を夢にせしとの知らせ今夕來らんとは誰か思はん。掌中の玉を碎きて驚く父。機上の錦を斷ちてかなしむ母。れもひやるだに胸いたきに。香爐煙ひやゝかなる處。かたみの衣に對するこゝちやいかならん。

## 野外の春風

少女は小兒の守しながら。田圃づたひに草つみあるく。日かげこゝちよき頃にもなれるかな。わづかに頭もたげたる土筆。枯薄にまじれる嫁菜。つまれて今は玉の如き手にや觸るらん。車來りてよけよともいはねば。價をはたる野守もなし。野外の春風我と人とを吹き去り又吹き來る。

## 古寺

六地藏鼻落ち手欠けて。子どもが積みたる小石のみ堆しされど格子の中なる本堂の佛はなほ光を放ちて。浮世の暗を照らすに似たり。梅を尋ねて思はぬ古寺を見いだしたるもおもしろきものなり。花は手水鉢のうしろの紅梅と。井戸のほとりの白椿とが盛りなるに。詩人めきたる參詣者も見えず。寺號は何といふらん。門の柱にもえるしてなし。



## 彼岸櫻

豆腐屋の軒には田樂の旗をひるがへし。青物屋の土間には獨活の白きが木の芽の青きとならびあらはる。花は今十日もたゝば盛を見すべし。彼岸櫻はすでに擔はれて花賣の肩にあり。

## 花時の雨

降るとみえて車は母衣かけたり。苔の桃には惠みなれども。盛の梅には情なし。樓上に碁を圍む閑人には良友なれども。一年の生計を花時に立つる餅商人には怨敵なるべし。

## 夕ぐれ

風はいよ〳〵しづかに空はいよ〳〵霞めり。少女の顏に似たる

月かげまだおちこぬもおもしろし。土筆つみあつめて歸りし人。
母のそばにいたりしや否や。

## 淺草公園

淺草公園ハ春まさに好し。豆に飽きて屋根に行く鳩。友よびつれて地におるゝ鳩。參脂の群集を立ちぞまらするも賑ひの一つなり。中店の簪屋は島田唐人髷の客足を引き。奥山の寫眞店は兄弟づれの小學生徒を捕へたり。靴の音下駄の響。賣物の聲と相和して觀音堂をぞ取り圍む。いざ花屋敷に象の藝をや見ん。一直に櫻豆腐をや味はん。

池の半に橋あり。此邊には麩を多く糸に貫きて緋鯉見る幼兒を待つ。投ぐれは忽に浮び出でゝ樂しげに食ひては沈み。沈みては又浮ぶ。橋を渡れば猿見る客市を爲せり。柄杓の如きものに胡蘿





蔔の切りたるを盛りて。之に食はせよと勸む。與ふれば手をさし伸ばし口つきだして嬉しげにくふ。

山雀の藝を見る亦一興なり。籠なる鳥は馴らされて其命令を聞く事人間の如し。いろはの文字を當てよといへば。嘴にて指されし札をくはへ來り。住吉詣せよといへば鳥居より飛び入りて宮巡りをし鈴を鳴らし。又三時の鐘撞けといへば鐘樓にのぼり綱をくはへてちん〳〵〳〵と數を誤らぬも妙なり。心なき鳥の馴らされしはいふまでもなく。之を教へ付けたる人の術また不思議ならずや。人にして鳥にだもとは斯かる事にやあらん。

こゝを出でゝ少し行けば玉乘の藝あり。少女美服して汐汲を舞ひ三番叟を踊るも皆玉の上なり。玉は足に從ひてまろび。足は玉に從ひて動く。あたかも平地に在る如し。春風は靜に紅白の幕を吹き。遊人ハ木戸口より押し合ひつゝ入り來る。花中の花に別れ

て花外の花に目を奪はるゝは。人間の常なるべし。

瓦斯燈かゞやく處。醉ひて歌ふあり飽きて議論するあり。廣小路近邊の小料理屋にぎはふ春の夕暮ぞかし。木の芽は竹の子と共に膳に上り。蕗の薹は白魚を助けて椀に浮ぶ。老嫗の孫つれたるは一年の寺參兼ねたる歸路なるべく。軍歌を鼻唄の書生連は試驗後の鬱散にやあらん、誰ともいはず彼ともいはず愛をかはすものは春の一時にあり。薄月夜見えそめたるに。鐵道馬車の燈火なは花の面影を離れず。

## 赤城の通

赤城神社の裏門をおりて眞直にゆけば。我住む前のとほりなり。この狹き道を狹みて兩方の家々梅の木おほく。今を盛と咲きみだるゝ頃は。赤き白き花びらのひら〳〵と飛びくるもうつくし。





夕日かぐれたれど急ぐべき道のりにもあらず。

## 堀端

日曜の朝九段より糀町の堀端をすぐるに。綠十分の柳は烟れる雨の薄衣をかけたるこゝちして。絹地おぼゆる頃なり。六日の苦學を忘れんとする女生徒。半日の散歩を試みんとする兵卒。ゆくあり來るありて畫中に聲を添ふ。

## 友の不在

夕ぐれに友人を訪ふに。在らず。六時までにゝ歸るべし待ち給へと妻君とゞむ。新聞の廣告までよみつくしても歸らず。七時になりぬ。妻君は下婢と共に門に出で窓をのぞきなどして心配す。辭せんとすれど。その心配を無にせんもとて强ひて又新聞をくり

かへす。八時も鳴りぬ。妻君酒もちいで〻一つとすゝむ。飲み立ちにもせられずなりぬ。戸外の足音それかと聞けば隣に消え。又は郵便と呼ぶ。九時も打ちぬ。つひに歸らず。妻君は頻に謝し。下婢は庖にいびきの聲を立つ。

## 義太夫文粹の序

余は常に能を見謠を聞き謠本を讀むを好む。然れども見て面白きものは聞いて左程に無きものあり。聞いては眠くても讀んでは大に味はるゝものあり。是れ其主たるものにおの〳〵目と耳と心との別あればなり。淨瑠璃に於ても亦然り。田舍者が見てさへ大騷をする忠臣藏も。文章家の批評には餘り掛からず。寄席に出て大喝采を得る朝顔日記は。却りて芝居にしば〳〵現はれざるが如きも一例ならん。岸上兄の義太夫文粹成る。其讀んで面白く文章として味はるゝものを撰ばれしは。我文學界の爲めに多謝する處なり。今や上野向島至る處に春あり。都下の青年諸君よ。遊びつかれて歸り來らば閑窓のもとに此書を繙け。





## 植ゑたる櫻

植ゑたる櫻はつきたり。つぼみは薄紅の唇を見せたり。春風は賴みある枝をしづかに動かせたり。朝にいづれば送るが如く。夕にかへれば迎ふる如し。花や主人に忠なる。主人や花に孝なる。

## 歌舞伎座

春服すでに成る。姉は綠なほ若き柳の如く。妹は紅まだ淺き櫻の如く。母の左右につきて土間に入り來る。指さして羨む少女あれば。目を向けて評する書生あり。歌舞伎座の幕いまだ開けざるに。

歡びと樂しみとい春色と共に場に滿てり。新聞の評讀みて『義時』を見んとするもの。歸りし人にすゝめられて『石橋』をあてに來りし人。まだ見ぬ先の評判い。昨夜寐られざりし話に和して湧き出でぬ。柏子木鳴りぬ。幕うごきぬ。百千の眼は注がれて舞臺にあり。髮の小言も再び聞えず。仕立の苦情も再び聞えず。

## 小金井

寐心地よき枕は。鶯ならで敲かれたり。此日曜を小金井にと友人に連れ出されたり。瀛車にも乘らゞ人力にも乘らず。語りつゝ歌ひつゝ同行すべて四人。喉かわけば茶店によりて蜜柑を吸ひ。道二つになれば畑打つ男を呼びて尋ぬるも興あり。堀内村のはづれよりは玉川上水の水道に沿ひて芝生の上を行くに。木瓜の紅なるが黃なる草花と咲き交りて一筋の流れを狹みたるは。先づ





心開けたる野外の春なり。行けども盡きず歩めども果てず。二時過ぎてやう〳〵境村に着きぬ。聞けば水邊の道四里に餘れりとぞいふ。足に豆いだして靴を提ぐるもことわりなりけり。茶店の老婆は。見る〳〵十串あまりの團子を平らげ盡されて。種切なりとぞかこつ。以て飢虎の當るべからざるを知るべし。又芝と菫とを踏みゆく事一里あまりにして。兩岸てと〴〵く櫻になりぬ。花は未だ固く封じて人間の見るを免さゞれども。若葉の赤く艶やかに烟りわたれるさま。おのづから一種の風致ありて。木陰に醉客を見ざるも惡しからず。小金井橋の柏屋にのぼりて午飯せしは四時に近かりき。夕陽更に霞を送りて美人夢まだ暖なる十里の長堤。水に映じ天に香りつゝ次の日曜を約するに似たり。主婦膳を携へ來りていふ。六十軒の葭簀店も一週間立たば開け。藝妓も明後日は東京より來ると。然れども余は未開の花見に來りし

なればと笑ひつゝ盃を取れば酒味までも時候はづれなるこそあさましけれ。國分寺よりは瀧車に運ばれて。晩景に對しつゝ。新宿に向ふ。隣席に少女あり。父にすゝめて再遊を請ふものゝ如し。

## 落花

十五六の娘。塵取と草箒とを持ち。空を仰ぎて立てり。落花雪の如く。髪ともいはず袖ともいはず降りかゝれり。無情の蝶はかしこに行きこなたに來る。

## 春の月

春の月かすみわたれり。思ひ起す少年の我を照らしつるもかれありしを。塾友うちつれ三島社頭に櫻をりつる夜半もありき。我歌へば月徘徊すと一人が吟ずれば。又一人が我舞へば影綾乱すとて劍舞せしさま。目前にあり。

## 一損一得

目黒より二本榎まで車に乘りたるに。車夫道をまちがへて甚しき損をせしと一人がうらめば。其代りに知らぬ道を覺えたりと又一人があきらむ。學問にも實業にも此心得あらば何事かわが得とならざるべき。

## 藤棚の下

ふくらむといひし莟は見る〳〵乾坤一白の雪を漲らし。雲よとながめし梢は時の間に滿目の新綠となりはてぬ。移り易きは人事のみならんや。花房短き藤棚の下に床几を占むれば。少女は猫を膝よりおろして茶盆と笑顔とを捧げ來る。

## 目黒

目黒不動の門前に數軒の茶屋あり。家毎に筍飯を炊くを名物とす。綠陰の殘花を探り疲れてこゝに盃を呼ぶ客。半は佛のめぐみなるべし。山吹も盛なり。若楓も見事なり。酒さへ肴さへ富みたる宿をいつか忘れん。下婢更に藤の花を押したる紙もちいでゝ誇り示しつゝ。且つ曰ふ。あの棚なるが此花にて。すぐれて長きは四尺九寸八分に達せり。其咲き揃ふは今十四五日の後あらんと。立ち出でゝ見れば牡丹の莟も大さ猶豆の如し。

## 村又村

麥の長さ尺に滿たず。作りわたしたる梨子棚ゝ一面の霜を凝して。春色なほ闌なり。滊車は早し。村また村。家走り農夫飛ぶ。





## 枳殼の花

からたちのわか葉すゞしげにて。花のいろ露よりもあざやかなり。蝶おひかけて來る少女ゝ。かの花に手を觸れんとす。花は少女に毒あるをも知らじ。少女は花に針あるをも知らじ。

## 上野の塔

何となくにほひわたる朝風。花のあとを吹くもなつかし。上野の塔れもしろく畫がきいだされたるに。殘月しづかに楓の枝に在り。

## 運動會

むらさきの袴。山吹のかんざし。体伍整然と女軍は今ぞ市をすぐ

る。羽織袴の男教師は前駈し。束髪の女教師は殿して。向ふ處は何がしの原なるべし。小學生徒の運動會も流行とはなりにけり。藤ある寺に新空氣と新智識を得んもよし。菜種さく野邊に新唱歌と新体操とを演ずるもよからん。すゝめやすゝめ。軍歌の響と共に質素なる男隊の一列よ。

## 暮春の花

天氣はよし日曜にはあり。暮春の花見あるかんとて。まづ角筈の藪花よりはじむ。園ひろからねど。朝日こゝろよくさして。作りならべたる牡丹のいろ〳〵主人の工みをほこりがはなり。櫻湯のみつゝ見めぐらすに。白き雪の如きあれば。赤き火の如きあり。うす紅なるは美人の浴後のかんばせに似て。色香の自然なる。いふべくもあらず。聞く此處にて牡丹の花びらを酢に漬けたるを客にすゝむと。朝まだ早くて試みざりしこそ殘りおほけれ。それより大久保にいたる。さしもに多き躑躅園。ところとして春風を領せざるなし。花は帽子とかんざしとをのこして。むれゆく人影をうづめ。人は植木屋ならぬ家をのぞきて。花ある門毎にあらそひ入る。平原數町つゝじか人か。源平の旗色をたゝかはして人に媚ぶる花あり。天然の美景を反映させて花にほこる人あり。たゞ恨む。これのみにあきたらずして吟界を俗了する活人形あるを。團十郎の鏡獅子。菊五郎の公曉。巧はすないち巧なりといへども。

## 初覆盆子

風みどりに吹きて麥い半ば穗を見せたり。梅探るとて道問ひし家。童に敎へられて渡りし橋。なほ形を隱さずして木陰にあり。初

覆盆子の實い刈りうへられて牧童の荷を裝ふ。

## 網するも時

芦すでに水を離るゝこと二尺。波の動くところ魚活潑に遊ぶ。來れ學校を終りし市外の少年。顏を泥にして鰷を網するも時あり。草に席して鮒を釣るも時なり。夕日影高し。母の待つにはまだ程あらん。

## 龜井戸天神

伏して鯉を呼ぶものあり。仰ぎて藤を見るものあり。欄干影を倒にして衣香半ば水にあり。童男は靴を手にして太鼓橋を渡るもよし。童女い拜殿に舞樂の繪馬を見るもよし。龜井戸天神の社內い夏こそ新なれ。





## 田圃の道

旗ある處には酒あるを知る。車行く處には祭あるを知る。我は何くに向つてか歩せん。田圃の道は近く見えても遠し。綠なる浮草の上に蝶は二つ追ひかけつゝぞ飛ぶ。

## 日は長し

盃にべにを流したる如き雲。夕空を色どりて散乱す。夏らしくもなれるかな。白薔薇は窓をのぞきてかをれども主人は在らず。日は長し。月は後園の松にかゝりそめたり。

## 新晴

竹の子は三尺のびて書齋の窓にとゞけり。朝日うつくしく昨夜

の雨を水晶の如くに色ぞる。旅情うごきて既に新緑風からばしき處にあり。鎌倉海邊に一夜の閑を買はんも今ぞ時。

## 初旅

わがはじめて旅せしは十七の年の春なりき。從弟の金毘羅まゐりするといふにさそはれて。家をいでたるは三月の二十二日か三日とおぼゆ。金毘羅とは讃岐の琴平神社にて。わが故郷の宇和島よりは五十里がほどの道なり。その日は十里の道をあるきて。大洲の巽屋といふに宿れり。次の日朝とく立ちて若宮といふ邊をゆくに。廣漠たる平原ことく〳〵く菜種の花ざかりなるにあふ。黄金を吹きたる春風の色。今なほ目前にあり。その後の泊り〳〵を今おぼえず。中山三里櫻三里などのくるしかりしさま。和田濱の波うちぎはゆく道の景色などは忘れんとしても忘られず。金





毘羅の町に着きしい正午なりき。寅屋といふに宿りて。朱ぬりの欄干に倚りたるときのこゝろよさ。おもふごとに象頭山も影を見する如し。この時の記行かきたる中に歌も七十何首ありしとおもへど。いつのまに反古になりしか。死にたる兒の年をかぞふるにも似たり。

## 麥秋

麥秋といふ歌の題を見ておもひいだしたるは十一の年なりしとおぼゆ。漢學の師匠中島萬翠翁につきて詩を習ふころ。麥秋風といふ事を質問したればすべての草木は秋紅葉するものなるを。麥ひとり初夏の時節に赤らむをもてかくはいふなりと敎へられし事。なほ耳にあれど。數ふれば二十四五年の昔になりにけり。

## 亂鐘

人のうちにゐたるに。亂鐘しきりに聞ゆ。火事近し。いでゝみれば人ごみの中を。十歳ばかりの男子なく〳〵手をひかれてにげもく。燒けだされしなるべし。ラムプ粗略にとりあつかふ人に。あはれ此ありさまを見せましかば。

## 父の墓

垣根のかなめは若芽いでそろひて花よりも美しく。一冬しのぎたる梅櫻は西に東に枝をのばして。みどり心地よげなり。この中に寒けくたてるは父の墓のみ。無情の苔は年々石の文字をさへ隱しゆく。





## まぐろ

十七八年のむかし余が廣島にありし頃。旅宿の下婢かけ來りて。旦那めづらしきものを見におはせといふ。何ぞとおもへば。大なるまぐろを荷なひて門をとほるなり。余が國にてあのやうなまぐろゝ。毎朝幾十頭となく魚河岸にならびてあるをと笑ひし事ありき。此頃遊仙窟の出板をめづらしげに批評しさわぐ新聞を讀みてふと思ひいでたり。

## 夏菊

雨ふりいだせり。かなたより赤き黄なる夏菊を車一つにつみて老人ひき來る。緣日に出づる道に降られて歸るなるべし。なほ餅あきんどの失望こそおもひやらるれ。

## 堀切

晴れんとしては又ふりいだす梅雨の鬱陶しさにあてられて。おくるともふすともなく鬱々たる事三日になりぬ。あまりの不愉快さに。堀切の花菖蒲みんと勇氣を起し雨を侵して家をいづ。東橋をわたれば水上うすぐらく煙りたるに。蓑着て掉さし下す舟も見ゆ。十里の長堤きのふの春は何れの處ぞ。青葉のもとに下駄の跡もまばらなり。

花もりがすみしわらやのよしすだれ
まきすてられて夏たけにけり

あぢ吟じゆくほどに梅若塚もすぎぬ。

雨そゝぐ青葉がおくの古塚に
たれ春の夜のゆめさますらん

いづこの田も田植はすみて。早苗の色もすゞしげなるに。農家の





軒なぞ書がきつゝ。水のまん〳〵とたゝへたるもゆたけし。村の子どもら道を遮り。旦那買うてといふをみれば。手毎に花菖蒲もちたり。花いいらねど堀切の近づきたるを知らせたるは謝すべしと。先年こし時に。誰かゞ笑ひすぎしも思ひいださる。花作る家に入れば。車も少しは門にあり。傘さしながら園をあちこちとぬひあるくに。鷺の蓑毛ぬらして立てるが如きあれば。燕の翼を張りて舞ふに似たるあり。種類かはる毎に名も又かはりて一々に記臆しつくすべくもあらず。五節の舞の優雅なる。獅子奮迅の活動せる。かがり火のもえたちたる。月の桂のあざやかなるなど。いづれかおとらんされど名の實に優ると。名のために實を失はしむるとは。天下の通弊なるを。花もし意あらば其札を取りてとやいふらん。雨いよ〳〵くらくなりて遊客半ば散せり。余は小高き岡にのぼりて茶をすゝりつゝ。欄干による。番傘さして酒はこぶ

下婢。ふりこめられて詩を吟ずる書生。かの波うつ花のかなたこなたを色どりて。畫によく似たり。歸らんとして車に乘れば。主人おくり出でゝ少女の如き家づとを前にのす。雨のしづくもはやかゝりぬ。いざもろともに歌人の家にゆかん。先に同行せし病魔は道よりにげて影をもとゞめず。

## 新著の草稿

先月わが出板せし書い古本店にならびたりと嘆息すれば。傍よ花賣る翁ありて。旦那も一昨日の菖蒲をはや抜きすて給ふものをとあざわらふ。百合を新たにさゝしめて花瓶に向へば。新著の草稿五六枚でかしがほに机より半ば垂れたり。

## 蚊軍





三更家に歸れば。紋屋の中の暑さたとへんにものなし。戸を開き月を入れて椽側に筆硯をもてあそぶに。竹風ときゞ來りて涼味いふべからず。たゞおもはざりき。足手ともいはず顔ともいはず。蚊軍の飢をすくはん兵粮に充てられんとは。

## 夏の虫

夏の虫とて厭ふべきものゝみには非ず。傘の如き芭蕉の葉に同じ色なる青がへるのうずくまりをるも涼しげなり。手もて動かせば輕く飛びて又他の葉にぞ住みかふる。蜘蛛の糸に朝露のかゝりて落ちんとしつゝ風にゆらめくもおもしろきに。作りぬしはその上をわたりあるきて。なほ建築に工夫をこらしつゝある如し。小兒は見とれて輕業にもまされりとや思ふらん。蝸牛は竹垣の陰に角振りゐたれど。誰もにくまねば人を恐れんともせず。

一つの李に全力をつくすは蟻の社會あり。ゆくあり來るあり。報知するもあれば途に會釋するありて。道をなし山をつくる。分をこえて床をのぼるはにくけれど。土にはたらくは見るにつれづれならず。

## 不忍池畔

殘照光を收めて高等中學の時計臺ひとり暮煙の外に立てり。食後散歩の客は不忍池を中にしてうちつどふ。少女あり書生あり ゆくありかへるありてさま〳〵なれど。掬し來る涼味い一つなるべし。泥中の美人も晩風の弄ぶにまかせて。衣香扇影の中に天然の笑を見す。

## 老木の陰





いてふの老木たるゝ處に。わが書生の境界を半つひやしたる家あり。主かはり客去りて行人また其世ならざるに。風ひとり緑を吹いて止まず。謡曲通解の選者たらんも知らずして謡本よみたるはあの陰なりき。和文學史の著者たらんも知らずして英文學史を勉强せしはあの窓なりき。れもひれてす。かの家に老婆ありて余が淨瑠璃本よむとて不思議がりたる事ありしを。今も彼人無事にして一樹のかげを時に夢むや否や。

## 海水浴

汐干れば歩みて具を拾ふべく。潮滿つれば浮びて泳ぎを試むべし。松緑なるところ芦靡くところ。何ものか詩人の好材料ならざるべき。余は此に遊ぶこと一日。長く横はれる品川の出崎は。浮島の如き臺場と共に親しみ來りて我窓に向へり。遠く晴れたる房

總の山は鷗の翼に見え隱れして時に筆執り疲れたる眼に映せり。浴を終れば家婢盃盤を持ち來る。風浴衣を吹いて夕陽すゞしく波にあり。

## 十二叢

水に臨む欄干。影倒まに落ちて衣香波を染む。拍手の聲連りに起るゝ鯉を呼ぶなり。鯉の浮ぶ處。水母の如く集まり散るは麩の投げられたるなり。醉うて瀧をあびる人。醒めて堤を散歩する人。かの熊野神社に參詣する客と共に暫くも絶えず。近年ことに賑はしく爲りたるは夏日の十二叢なるかな。先年は枝豆卵子の外に肴なかりし家も。今年は鮓飯蒲燒の肴板を掲ぐるを見る。

## 芋田樂





余ゝ常に好みて曹司谷の鬼子母神に遊ぶ。物ふりたる樹木は堂を繞りて俗界の夏を隔て。冷かなる空氣は階を昇りて僧家の夢を拂ふ。去つて茶店の老婆を訪ひ。一串の芋田樂を味ふも亦一興なるべし。唯恨むらくは。鳩の啄む處。鷄の歌ふ處。我半日の筆硯を洗はしむべき閑窓なきを。

## 向嶋

渡舟は風と客とを乘せて三圍堤に向ふ。芦青く帆白き處。遙に藍一點の筑波を認め得たり。乘合には書生あり少女あり。少女は日傘を傾けてボートの下るを詠め。書生はステッキを擧げて東橋の工事を評す。

堤を下りて三圍の社にも詣でぬ。牛の御前にも詣でぬ。黄ばめる櫻の落葉を踏みては碑を讀み鳥居を撫しつゝ。境内を遊びめぐ

れば。風また後ろより從ひ來る。

餅讀る店。氷賣る店。酒賣る家。蕎麥賣る家。心しづかに客を待ちつゝあり。醉うて有馬の温泉にや浴せん。飽きて百花園よや腹こなさん。

白髮の社を右に折れて花屋敷に入る。七草はまだ盛ならねど。女郎花の丈高き萩の道に垂れたるあぢ。苔がちなる却りて興あり。池の蓮は半バ實となりたれど。花なほ散りも盡さず。蟬の聲遠く近く聞えて。涼氣園に滿ちたり。

歸路は橋場の渡をわたりて石濱神社を訪はんもよし。遠く千住にまはりて松陰先生の墓を弔せんもあしからず。淺草の塔おもしろく霞みて。又もとの道を歸れといふにも似たり。

## 萩ちる





萩ちりて庭を埋めたり。書生箒を持ちてゆくに。かれ詩情あし。掃くなと叱られて喜びて去る。露白し。隣の犬もまだあとつけず。

## 花屋敷

向島の花やしきにては。三四年前まで梅干の外に茶菓子をすゝめぢ。客命ずれぢもなしと答ふるを例とせり。しかるにいつの間にか規則かはりて。此頃は茶と共に餅菓子など持ち來る。習慣法も需要には勝つあたはぢか。

## 花作る僧

僧には俗も及ばぬ金儲の上手なるものあり。小石川の某寺住職は朝顏作る事に妙をえたるが。花の頃い毎朝二十四鉢づゝ種類のかはりたるものをえらびて本堂にならべ。午前七時より十時

まで人に縦覧せしむ。その時間中は和尚佛前に坐して讀經しつつあり。人々茶代のかはりに賽錢を投せざるを得ず。

## 萩は

萩は月夜雨中ともによし。露の白くかゝりたるこそうつくしけれ。庭一面に散りたるなど更に何ともいふべからず。たゞ日に映じたるはおもしろからずといふ人あり。

## 美術展覽會

十二歳の童子をつれて美術展覽會を見。かへる〳〵何の畫がおもしろかりしぞと問へば。かれ答ふ。曰く曾我兄弟。曰く阿若丸。曰く奈須與市。曰く八幡太郎。さても美の人を感せしむるは遲く。歴史の人を感せしむるは早し。

父子

小兒は幼稚園より歸りぬ。其姉も小學校より歸りぬ。父は物書きつかれて茶を呼べば。紙製の蛙と清書の點數とは前にならびぬ。我日は短し彼の年月は長し。

## 謠曲訓蒙圖繪の序

余は思ふ。大よそ畫の中に能畫ほどむつかしきものはあらじと。其故はいかゞ。山水にもあれ花鳥にもあれ。自然の美妙を材料として寫す種類の畫は。謂はゆる理想を以て作り出だすものなれば。よしや其松の木の枝ぶりが曾て地上に見られざりしものにもせよ。自然に有り得べき形を備へたらば以て足るべきに。能畫は然らず。一手一足といはんよりも。寧ろ精神がそこに至らざれ

ば人を感せしめがたきは。かの博覽會に共進會にさしも多く見ねたる能畫中。これはとおもはるゝが少なきにても知るべし。然れどもこゝに一つの困難あり。能の足づかひに似せんとして畫をかけば。身体たゞよひて定まらず。畫によく適はしめんとて能をすれば。實地より困難れこるといふ衝突是なり。先年或畫師の羽衣をかきたるに。長絹の袖をあまりうしろの方にかづきゐたるを見て。今少し前によせてはと評せし人あり。余は大に此評を賛成しつゝ。能にては動もすれば長絹の露が天冠に引つかゝるを恐れてうしろの方にかづく事なれど。畫としては頭の上にいたゞくこそ恰好はよけれと曰ひしに。畫師は頭を左右に打ちふり。否々先生はまだ能を知つて畫を知り給はぬなり。左樣に前にかづかせては。袖のなかば面を掩ひて全体を損するに至らんと。答へし事ありき。能畫もとより能に背くべきには非ねど。能かならずしも悉皆畫になるといひがたき道理は。是等の苦心あるを以てもれもふべし。謡曲書肆江島君。此度訓蒙圖會を出板せんとして序を余に書けといふ。其筆者を問へば故曉齋翁の令孃なり。翁の能面は余のしば〳〵見て滿足せしところ。豈よろこんで之を諾せざるを得んや。一言以て能畫の容易ならぬ點を世の看客諸君に紹介するのみ。

## 二つの鴨

銀杏の老木秋をのこして。水の緑を半ば染めたり。橋ゆく人の眼い浮べる二つの鴨にむかへど。かれはかへりみもせずしてかなたに行く。夕日かたむくところ。いふべからざる詩思をこめたり。

大久保彦左衛門

青山より高輪へ行く道に白金三光町を過ぐ。車夫いふ。この立行寺といふ寺に大久保彦左衛門の墓あり。立ちより給はずやと。門前の家にて線香に火うつしてくれたるを車夫にもたせつゝ寺に入る。墓はやゝ奥まりたる處にありて。大きからぬ五輪なるが。人々の捧ぐる旗に取りかこまれ。香の煙に黑まされつゝ立てるも春しりがほなり。おもへば去年の暮にや。歌舞伎座にて此墓主の芝居をせし事ありき。男兒うまれて其生涯を芝居に作られ。死して香花たえざる尊崇を受く。又快ならずや。

## 氷柱

川を挾む長堤。また一點の綠をとゞめず。水車に引く筧の流れい細き響きをたつれど。處々に氷柱を下げたり。日は傾きぬ。人影水の上にありて橋よりも長し。







## 田舍寺

田舍寺の門前に茶屋ありて老婆一人店を守る。客來れば竈に柴をりくべつゝ天氣のよくつゞく事などかたる。かたへの水桶にい綠ふかき檵と早咲の梅とを挿したり。客い花を買ひて寺に入れば。老婆い桶をさげてあとに從ふ。

## 食後の散歩

まけずは買はじとてゆきすぐる客を呼びとむるい植木店なり。櫻草を圍みてあれよこれよとさだめかねたる少女。薔薇の鉢をさしあげて人ごみの中をおされゆく書生。夜店のけしきこそにぎはしけれ。食後の散歩を試みんには市の近きも幸おほし。

## 千金

一日大久保なる友を訪ひしに多きなる躑躅のつぼみがちなる木をみやげにたくれり。家にもて來て築山の傍に植ゑたれば木々の綠と相映じて美しさたぐひなし。雨おちいだせりとて干しもの取りいるゝ女はいそがしげなれど。鍬かたづけてながめを る主人にはこれも千金に價す。

## 躑躅園

三時は打ちたれど日はまだ中々高し。大久保のつゝじ見んとて妻子をつれて家をいで。原町より外山にかゝる。かの花と相のりして歸る少女。風車ふりまわしつゝ其膝にたはむるゝ小兒。すでにかしこのにぎはしさを見せたり。かなたこなたと見あるきて終りに新躑躅園に入る。光はやう〳〵薄くなりて。たゞ一面の紅





にかすみわたれる西日の影。春の夕空こゝ又一しほなれ。人は大かた去りて物さびしき芝生には。子供二人が追ひまはし狂ひあそぶさへ景色のうちにて。日はいよ〳〵傾き花いよ〳〵かすめり。

## 若葉見

藤は花おちて莖いたづらに垂れたり。茶店の床几に休む客二三人。若葉見に來しなるべし。女は茶を出しをへて犬を呼べば。犬は來りて主人とたはむる。

## 東照宮

三百諸侯の奉献せし石燈籠は威儀をたゞして兩側に立ちならべり。葵の紋は苔にうもれてもなほ古色を存し。奉献者の姓名は雨にうたれても未だ讀みがたきに至らず。東照宮春くれて新緑

神樂殿をおほへり。日曜の快晴を幸に來り賽する士女。たれか花の名殘と共に此社の盛時を說くものぞ。

## 辨天堂

蓮の若葉浮びそめて畫具皿を散らせるが如し。夏のいろすゞしき水の上に。一宇の辨天堂は影をさかさまにして落つ。少女橋のたもとに立ちて魚のゆくかたに眼をそゝげり。

## 養蚕する家

いづくともなく紫に霞みわたれる夕ぐれに。星は數ふるばかり見えそめて。まばらなる里の火影花の如し。誰をやとひてか此けしきを畫がゝせん。誰をたのみてか此さまを歌はせん。養蠶する家すでに忙はし。少女の桑つみてかへる聲なほ山彥と共にひゞく。





## 月の大きさ

月栗の梢をはなれたり。あれはどの位の大きさならんと一人がいへば。金盥なりといふもあり。筆洗めしくひ茶碗といふもあり。世の中の事また之に同じ。大きく見れば大きく見え。小さく見れば小さくも見ゆ。

## 鎌倉の嵐

朝よりもよほしつる雨は嵐となりて降りあかし又吹きくらす。舟はのこらず引きあげられたり。漁村はいづくも戸ざゝれたり。また一人磯邊にいづる客を見ず。日もくれんとする頃ながめしさまこそものすごけれ。一度にくづるゝ氷の山は萬雷の聲とな

つて天にふるひ。白煙たてゝ山を呑み。巖を奪ひ勝鬪わぐるも勇ましきに。數千の白龍は頭そろへて磯を圍み去りまた來る。見る〳〵三崎の山影は波の底に葬られぬ。知らず靈山崎も陷れらるゝ事今夜の中にや在らん。かへりみれば礫の如き雨に顏を打たれて此晦冥の中に立つもの。唯我と踏みしめたる松が根とのみ。

歌にもよまれず筆もあたはず。

## 鶴岡

松原の涼しきひまより石の鳥居を見入れたる景色はいふべくもあらず。更に進みて朱の宮居を遠く望みたるおもむきは又たとふべきものもなし。鎌倉見物の客をして先づ神氣爽然たらしむるは鶴岡なるかな。田舍道者は石段の六十二あるを數へて喜び。東京書生は公曉のかくれし銀杏の樹を仰ぎて樂しむ。社頭に展覽會を評し了りなば。去つて池の蓮を觀んもよかるべし。我この社に詣づる事こゝに八度。されども夕日かくれて日ぐらしの聲をきくは今をはじめとす。懷古の情何ぞたへん。

## 賴朝の墓

老樹森々晝なほくらきに。青蔦ひとり横行しつゝ知らずがほなり。千載の下誰か賴朝の古墳に來り賽するものぞ。あはれかの村里は大名邸宅の立ちつゞきし處ならずや。見わたす粟生は榮華の街なりし夢の跡ならずや。秋風とこしなへに寒し。諸國總追捕使の墓門も今は徒に旅人の姓名を筆太に記し去らるゝを見る。

## 長谷の大佛

仁王門を入れば溫容慈顏なる大佛の御姿ゝ梢に聳ゑて仰がれ

たり。拜し終りて散歩するには池あり山ありて至るところの緑陰。炎威赫々たる夏の日を忘れしむ。石は苔を帶びて腰をかくるに宜しく。道は平らにして小兒を遊ばしむるに適せり。白蓮風かうばしき處に我い歌袋を解かんとすれば。小兒は馳せ來りて寫眞を見たまへと出だす。歌も出來たり寫眞も買ひたり。さらば又こん。子供よ。鎌倉の大佛樣とは是なるぞ。

## 權五郎の社

長谷寺の裏門を出でゝ海邊にいづる道の右手に社あり。鎌倉權五郎を祭る。富士大山の講中連はこゝにまうでゝ力を祈るとにやあらん。木陰の涼しき茶店には白衣金剛杖の絶間を見ず。力餅々々とすゝむる聲をきゝすてゝ今日も通りすぐれば。風は跡より待てしばしといふばかり吹く。



## 一車夫

雨中に小石川の金剛寺坂をのぼらんとす。道すべりて車すゝまざりしに。一車夫うしろより來りてあとれしを爲し。傳通院までくるとおもふまにぱや影もみえず。あゝ人を助けて報を求めざるは我國民の風。無名にて恤兵部献金をなすものはこれの大なるものなり。

## 忙中の閑

芝能樂堂に軍資献金の勸進能あり。余も切符を買ひたれば朝とくゆかんとて家をいでたり。牛込見附を入れば向より襟に『日本新聞社』の文字を染めたる配達夫來るにあふ。兩手を廣げて其新聞を讀みつゝゆくを見るに。何新聞やらに春畝伯の詩會を評し

て忙中の閑といへりし事をふと思ひいだしぬ。さては是らもその一つに數ふべきか。ゆいて霞關に至れば客待ちをる車夫あり。一人は卷煙草をくゆらし一人は都新聞にや餘念なく讀みゐたりしは。猶綽々として餘裕あるにやあらん。能樂堂い案外の大入にて官吏書生兵士商人夫人令孃の差別なく肩をあはせ膝を接して立錐の地をものこさず。我國に日清事件おこりてより號外賣の足にひまなきさへあるものを。忙中の閑人またおほきものかなとつぶやくうしろに人ありて。さらば先生い閑中の忙人にやと問ふ。然り歌よみも紅葉の時節には忙がしきものを。

## 久米幹文翁

十一月十二日久米幹文翁の葬を送る。細雨霏々として天ために涙を濺ぐが如く。行列の花みな露を帶びて草木も之を哀しむに似たり。柩式場に着するや。笛鳴り筆築和し祭式をはりて吊辭の朗讀ひきつゞきおこる。中にも小杉榲邨翁の文ことに其平生をつくして人を感せしめたり。あゝ翁は余と共に東京大學の編輯所に机をならべて筆を執りたることを忘れ給はじ。あゝ翁は余と共に長歌會を起して市谷の温古堂に集まり吟せしことを忘れ給はじ。あゝ翁は余と共に安房めぐりして柏崎の宿に月見せしことを忘れ給はじ。而して昔を語らんとするに今は則ち亡し。今日の『日本』新聞いい『翁の文章は能く簡勁に能く古雅に能く清新に操縦自在なるを得たり。而して今や翁逝く。我が文學界に此一文章家を失ふたるは天下の遺憾とする所なり。翁は水戸の人。大學に高等中學校に其他私公學校に在りて國文を敎ふる年あり。後進の諸生翁の恩を受くる者多し。故に翁の沒する敎育界にも亦一人を失ひたるものといふべし』と。世人に惜まるゝかく

の如きを聞かば翁或は瞑するに足らん。

## 我目を食ふ

西洋料理法を敎ふる人いふ。ジチューの汁は白色にてはうまからずとて態と色をつけ用ふるは。我目を食ふが如しと。此頃府下の雜誌に我文を寄せて六號字に植ゑらるゝを喜ぶ人あり。愛讀する人れそらくは作者一人のみならん。是も我目を食ふのたぐひにや。

## 大勝利

十一月廿四日埼玉縣の深谷に在りしに。夜の八時もすぎんとする頃。ステーションの方より『日本大勝利號外』と叫びつゝ來るを聞く。旅順口占領の私報を載せたるなり。土地の人々は明朝を待ち



て國旗を立てん祝宴を開かんなど議す。夜あけてステーションに至れば衆評囂々たり。七時十分の滊車にのりて歸るに。室内の人心何となく噪ぎたちて歡び狂するに似たり。行いて熊谷に至れば。窓外聲あり新聞々々と叫ぶ。窓毎に手を出だして之を呼ぶ客。いまだ見ざりし賑ひあり。商人買ひ書生買ひ農夫買ひ僧侶買ひ。味柑もビールも賣れざるに新聞は半ば賣れ盡しぬ。客みな之を手にして『旅順口は陸軍先づ十九日。海軍は二十日より陸海總攻撃を爲し。二十二日未明全く略取したり』と讀み了るや。愉快を連呼するもあり。萬歳を三唱するもあり。滊笛一聲黑烟を噴いて野をすぎ川をわたる。おのづから征清軍の北京に向ふにも似たり。

二十四年

# 蒐の水

## 柴人

折りためしわらびを柴に
おひそへて山路いそがん

日もくれぬ月もかすみぬ
ふもと寺火もみえそめぬ

あはれ世は楽しきものか
月をさへいざなひつれて
家路いそがん

## 舊宅





其一

木のもとのさくらの落葉　風ひとり掃きやよすらん
袖垣の一もとすゝき　虫ひとり宿り占むらん
朝夕にいでいりなれし　門の戸はやれかたむきて
草たかく蔦ぞとざせる　世の中はこれやことわり
書よみしまどもあるじを　わすれがほにて

其二

ふくろふの聲はいづくぞ　夜嵐のおとはいづくぞ
松がえはかはらぬ姿　いかにせんもれぬ火影を
芭蕉葉はその世のなごり　あひすみし人こそみねね
秋寒し星かげすごし　ゆめならで月はこよひも
いにしへのやどの軒ばや　ゆきめぐるらん

## 大原女

ありあけの月の下露
いたゞきて里にぞ出づる

摘みうへし花もさかり
折りそへし花もさかり

大原女の眞柴をめせや
花めせやわらびもめせや
春の里人

## 小兒の貝ひろふ袋に

ひろへ〳〵貝ひろへ
青貝ひろへ赤貝ひろへ

波は沖よりうちよせて
又もてかへる時もあり
おきわすれゆく時もあり

かへらぬうちにはやひろへ
波にゆられてちる紅葉
沙にこぼれてちるさくら





## 夕立

其一

足疾き雲はたちまちに
怒る日かげをおほひたり
ふきまく風
とゞろく雷
木の葉をそらに躍らせて

雀を籔にひそませて

其二

つぶてをつちに打ちつけて
今ぞすぎゆく雨のおと
みなぎる瀧
さかまく波
墨こぼしたるあめつちに
千軍萬馬の聲たて丶

其三

なごりの風におきふして
息ふきかへさぬ草もなし
玉なすつゆ
瑠璃なす花





かへるは今ぞうれしげに
芭蕉の上葉飛びわたる

## 浦の夕

其一

波のあなたに沈む日の
なごり色ぞる夕雲は
もえたつ海の遠近に
墨繪の嶋をかきすて丶
沖の方より消えてゆく
ながめ果なきわたの原
今こぎかへる小舟には
あすの煙や載せつらん

其二

波をかすめて飛ぶ鳥の
　ゆくへに黒く暮れのこる
すがたは岩か浮舟か
　またゝく星の影ならで
霞むそなたの山もとに
　見ゆる火影や海士の里
舟のかへりを待ちわびて
　妻は夕けをかしくらん

其三

雪とくだけて散る波を
　磯にのこして更けわたる
そらも一つの海原は
　暗より外のいろもなし
沖に吹きまた磯に吹く
　風のみ歌の聲たてゝ
苦屋の松の下かげに
　海士が夢路やおくるらん





## 浦の朝

其一

空の境を紫に
　くまぐりわけてほのぐと
夜はあけわたる海の上
　疊敷きたる朝なぎを
わがものがほにいでゝゆく

舟の帆かげも見えうめぬ

其二

半ば朝日に染められし
あの磯山の二つ松
風はいづこに眠るらん
木かげに歌の聞こゆるは
はやうちつれて里の子が
貝や拾ひにいでつらん

其三

汐にかゞやく日の光
砂にきらめく貝の色
花かもみぢか金泥か
日ははや山をはなれたり







波はしきりにまねくなり
いざ朝しほをあびてこん

# 草枕

## 花見の旅

### 其一　出立

官にある身の苦しさもよそに見て。此春こそ嵐吉野の花にと思ひ立つ。

今年はすべて時候おくれたれば。一目千本は二十日すぎ。奥の西行庵あたりはそれより十日も後なるべしと。其地の人は報じ來

れり。嵐山は上野の盛すぐして行けばよしと聞きたれば。是もよきほどなるべし。

時は四月の十八日。まだほのぐらきに家を出でゝゆく〳〵。

明暮に見なれし花のあたりまで
はや旅心地するあしたかな

など口ずさむ間もなく身は新橋にあり。

其二　下り滝車

かくて例の品川川崎横濱など過ぎゆくに。めづらしからぬ處ながら。花は黄に麥は緑なる畑つらを。桃櫻の紅白に色どりそへたるなど。春のながめは又ことなり。

相摸路にかゝる頃より。降り出でたる雨やうやう誠になりて。窓のガラスに烟りわたれり。箱根も見えず富士も見えず。心に畫きし海邊の景色も造化の墨筆に塗り消されぬ。



釣舟の歸るかたよりぬれそめて
はるさめ霞む三保の松原

停車場去れば停車場來りて。乘る人下る人。おくる人むかふる人。かへるもあれば行くもありて。樂しみ哀しみ一つにあつめて見もてゆく。同車には政治家あり商人あり官吏あり書生ありて話も議論もさま〳〵なれど。一人として花の上に及ぶなし。一の老農夫が同室に乘りあて懇ろ問ふ。旦那は御檢査筋などの御出張にやと。我忙がはしければ人も忙がはしとや思ふらん。然り歌人も花の爲に心そらなるものを。

無情の雨は天龍矢矧濱名湖などを殘すのみにて。名所の遠景はことゞく奪ひ去りぬ。夜に入りては寒さ衣を徹して堪へがたきに。眠けさへ添ひて琵琶湖も逢坂のトンネルも知らざりしうちに。京都々々と呼ぶ聲耳にひゞく。初時鳥もこれにはいかでと

ぞおもはるゝ。

其三　四條の旅寐

十二時も餘程まはるころ四條の萬屋に着きぬ。膳に向ひて給仕の女に嵐山やいかにと問へば。祇園の夜櫻は今日の雨にて散りしとぞ聞く。されど都踊あれば之を見よなどすゝむ。重ねて問へども嵐山の答はなし。知らぬにぞあるべき。江戸子にて淺草の觀音知らぬたぐひもあればと悟りつゝ筆たづさへて閨に入る。小女蒲團もちいでゝ何方を枕にといふ。清水の方にといへば。あすの日和の御利益こそなど笑ふ。つまらぬ言も願ある身にはいと頼もし。

其四　西山の花

人は花に背かねど花人に背くが春の習なるにまして今年はじめて百里以外の花盛に逢ふこと。得がたき中の第一なるべし。





今朝は恨みし雨のなごりあたゝかに晴れて。藍を引きたる東山の窓ちかく立てるこそなつかしけれ。

まづ平野に詣づ。夜櫻の名殘とて篝火たきたる跡あまた木蔭にあり。花は數へも盡されぬほどなるが。半は笑みてうす紅なり。神前ちかき木々に人丸赤人貫之楊貴妃など書きたる札立てたるは有らずもがなと思へど。さる名木を寄進せし人々の心いはてらはしげなるべし。名もなき花の並みたてる方には茶屋どもつくりならべて。桃色の提灯うつくしく梢の色に映じあひたり。

次に北野に詣づ。こゝは梅の散りおくれたる中に一二本交れるのみにて。ほめいふべき限ならねど。春の色は森をおほへり。

小松原といふあたりを行くに。麥生の雲雀ひまなく鳴きかはして興ふかし。松の中より塔の霞みのこれるを車夫に問へば。御室とぞいふなる。やがて境内に入れば。鶯むかへ花もてなして昔の

春に逢ふこゝちす。

あは雪のこぼれしばかり散る花を

をしとや絶ねずうぐひすのなく

かへらんとするに。茶店の女どもあまた出で來て手をひろげ道をさへぎりつゝ。かけよ〳〵とすゝめて止まず。わがよみかけたる歌の下の句を妨げたりとも彼は知らじ。彼があてにせし客うしなひたる恨みは我も知らぬものを。

廣澤の堤をゆくに若木の櫻いま一雨を待つに似たり。燕の水をかすめてうちつれ飛ぶは。彼も花見にや渡り來にけん。

清涼寺の花をも見て渡月橋のこなたに出づれば。織るが如く縫ふが如き都人。目もあやなり。先づ車を茶屋につけさせて樓にのぼる。樓は水を隔てゝ嵐山に向ふところにて。滿山一白。雲かと見れば動かず。雪かと見れば松を殘せり。





あらし山花の盛にあひにけり

定めなき世と誰かいふらん

さしすてゝ花や見るらん大井川

いかだのうへに春風ぞふく

天も花に醉へりとはかゝるさまをやいふらん。香雪十里とはかゝるながめの形容にやあるらん。人は花に醉ひ花ゝ人に醉ひ。波も嵐も花に埋もれて聲立てんともせず。

あるゝ木のもとに毛氈うちしき瓢簞かたむけて圓居するもあり。又は水にのぞめる掛茶屋に重箱開きて三々五々と盃とりかゝし樂しむもあり。良家の少女ゝ今日を晴れと粧をこらし。侍女どもにかしづかれて日傘さしつゞけ扇うちかざしつゝ來るあり歸るあり。正にこれ一幅の錦繪をうちかへし見もてゆくにや譬ふべき。都名所圖繪にて京の花見は既に想像せり。『熊野』の謠に

て貴賤群集の樣をも腦中に畫きゐたり。思はざりき。聞きしにも思ひしにもまさりて美しきものならんとは。花か少女か少女か花か。花は少女を花と見るらん。少女は花を少女と見るらん。言ひも得ぜ名づけも知らず。

酒を命ずれば美酒來り。肴を命ずれば佳肴きたる。皿に紅あざらけきは鯉なるべし。露に横はり浮べるハ若鮎なるべし。先づ箸とりて春風に吹かるゝ心地。何にかたとへん。

酒もめぐりぬ。世は更におもしろくこそなりぬれ。樓を下りて橋を渡り岩根づたひに川上へとのぼりゆけバ。こなたの梢したしみ迎へて霰とふりかゝるも中々情あり。かなたの岸には聲ある花いよ〳〵咲き加はりて。招くにも以たり。人世たゞ意の如し。別れの文字さへ無からましかば。

なごりをのこして法輪寺に詣づ。こゝもよし。松尾は少し過ぎたるもありて木かげに一面の雪を見せたり。

松の尾の峯のあらしも聲とめて

西山づたひ花や見るらん

梅宮にも詣でゝやゝぎりに歸れバ。夕陽なほかたむかず。

其五　東山の花

あすに殘しつる東山も見て來んと思ひなりぬ。今は車をすてゝ四條の大橋わたる〳〵見れば。堤の柳絲長く煙りわたりて。花の木いづくともなくながめに入るも名におふ都の春ぞかし。祇園の花も聞きし如くは散りてあらず。高臺寺の鐘樓さびしく花と松との間に立てるなど。到るところとして春に興あり。芝生に辨當おきならべて老嫗三四人花見し居たるは。古寺の昔や語るらんとあはれあり。

清水こそ謠にてしば〳〵出逢ふ名所なれ。舞臺のふもとを咲き

包める花。ことに見ごろなり。少女の赤裳かゝげつゝ詣づるも所にとりての花ぞかし。

見わたせば。嵐山より山つゞきにたゞり〳〵て淀山崎などいふあたり。ねしあてに知らるべし。唯一筆に綠をぬりたる如く。うすくあゝく霞の衣に覆はれたるこそおもしろけれ。ひとり夕日の外に影をのこせるは東寺の塔のみ。

## 第六　都踊

燈火花の如くかゞやきて美人花の如く散り亂れ舞ふ。名づけて花の都踊とぞいふなる。花の頃二十日間を限りて祇園町に興行するさだめなり。豫ねて見たしとは思ひねたれど今年とまでは思はざりきまして今夜とは思ひもよらぬ事なりけり。入口には花のもとに篝をたきて出で入る男女を照したる。先づ俗ならず。舞臺は正面にて左右に花道より。花道の上に高座ありて左の方を囃方の席とし。右の方を唄三味線の席とす。囃方は小鼓太鼓れの〳〵四人。大つゞみ一人にて。三五二八の少女ざかり。舞子と揃ひの紅葉に花を染めいだせる衣を着たり。唄三味線には年やゝだけたるを用ひて衣は黑地に摸樣をつく。數は囃方とむかひて九人とぞ定めし。物の音につれて幕あがり。唄にいざなはれて舞子三十人左右の花道に別れてねりいづる。京の島田髷に花かんざしふさやかにさしそへたる。たゞ同じやうなり。年は十二三より十五六までなるべし。

扇を取りて舞ふときは磯うつ波のつたふが如く。團扇をかざせは田毎の月をも寫すに似たり。朝風ゝ柳を吹きて袂かろく。夕汐は葦に觸れてなびけども流れず。離れては合ひ集りては散り。左に隱れては右に顯はれ。行き遠ひてゝ又立ちかへる。一たびは圓山の螢と乱れ。二たびは通天の紅葉と散り。三たびは禁苑の雪と

あつまり。四たびは嵐山の雲とおびきて。いづれも舞臺の畫と共に。唄の心と共に手を盡し舞ふ。さすがに都のなごりなるかな。かへりには祇園の山を逍遙するに。火影ひるの如く梢の色は星にもまがひて。見捨てらるべくもあらず。

かゞり火の煙は花にかすむ夜の
空れもしろくあは雪ぞふる

其七　稻荷詣

今朝ハ一番瀧車にて大坂に立たんとせしが。待て暫し伏見の稻荷にも詣でたし。泉涌寺もよきをりあればとて。ゆる〳〵と宿を立ち出づ。

大佛豐國神社三十三間堂いたる處に花あり。花ある處に參詣かねたる田舍むすめなど群集せり。泉涌寺を奥深く入れば清く靜けき森の中に月輪御陵立ちたり。拜みはて丶暫くは去りもやらず。老いたる寺男の御門の前を掃ふ外には又人もなく聲もなし。

花ならば箒とる手もたゆまゝし
かれ葉をよする春の庭守
雪の内に春しりそめし月の輪の
山松が枝にかすみたなびく

東福寺を入りて通天橋をわたる。一面の若楓谷を染め岸をおほひて。秋風夕陽の色すでに身にしむ心地す。

稻荷に着けば先づ鳥居左角の茶店に休みて瀧車の時間を聞きなどす。今日はをりよくも神輿の御旅所よ渡り給ふ日とて。山上山下おしあふ程なれば。賑はしさ過ぎていとさわがし。茶屋の嫗いふ。本社のみの御參詣ならば十時五十四分の瀧車に間に合ふべけれど。御山までは十二時すぎの發車ならではむつかしからんと。そも〳〵此社の赤鳥居は瀧車にて通る毎に茶屋の軒高く

仰がれたるを。いつか一度はと思ひしに。始めてくゞる事なれば。同じくは山上までもと決心して。靴を草履にはきかへ。今まで乘りたる車夫に案内させて鳥居を入り石段をのぼる。

拜殿には神輿四體裝束してあり。うのあたりゐは赤衣きたる人。杉の枝をかざせる人など居たる中を通りぬけて本社を拜し。小さき鳥居の幾百幾千もひまなく立ちつゞける中より。うしろの山路を右に左にうねり〳〵のぼるなり。

此山は三つの峯より成り立ちたれば。谷に下り峯に上る事三度して本社にかへるまで一里なりといふ。其間には石あり穴あり祠あり社殿ありて。いづれも信者どもより祭れる神体かぞへもつくされず。山めぐりする人々は此無數の參拜所毎に供物をそなへゆく事なり。洗米小豆油揚あられ蠶豆紅白の餅など手ん手に籠に入れて提げつゝのぼれば。旅は人眞似ごろよけれとて。我も大きなる籠に蠶豆の煎りたるを携へゆく。神もをかしとや思すらん。さりとてゝ殊勝とや思すらん。

わけ入るまゝに山深くなりて。こゝもかしこも岩躑躅の盛なるに。鶯の呼びかゝすも神さびたり。

春風に吹きのぼされて稻荷山
杉よりおくの花も見しかな

ところ〴〵に茶菓子など賣る假屋ありて。老婆少女こゑ〴〵に休め〳〵と呼ぶ。こゝにて手製の重箱を開き手造りの酒を傾くる田舍人の樂しみ。如何ばかりぞや。

露のやうなる汗をふきもあへず。顏を紅にしてのぼりくる娘もあり。いとむつましげに嫁の事はこりあひつゝ平地を行くが如き姑づれもあり。むかし清少納言が足つよき人を羨みしも此坂にやありけらし。我身は例の汗にひたりて洋服の表衣さへ帽子

さへ車夫にわたしぬ。息も苦し足も苦し。唯たのしきは心のみ。

あれなるが男山。これなるがおぐらの池。右なるは竹田。左なるは鳥羽。深草は此松の二の枝をしるべにして見給はゞ違はじなど。車夫ねんごろに教ふ。ます〳〵樂し。

茶屋に歸れば目ざしつる瀛車は今すこし前に出でつと云ふ。二階に上れば飯くふ人々酒のむ人々。立錐の地をも殘さず。しばらくありて膳きたる。一肴一菜器もいと麁末なり。時にとりては百味を備へたる心地して箸をれくほど。又膳きたる。こはいかにとなじれば。先刻のは間違なれば是と引きかへてと云ふ。彼は下等是は上等。されど既に終へたるを何とせん。隣席の老人これは御損なりしと笑ふ。いやこちらは損なし。彼こそ損なれとて我も笑ふ。

今夜は大坂中の島の櫻をも見る。篝のほのほ高く低く花を焦して。食後散歩の客なるべし豐國神社の前を埋めたり。

## 其八　吉野の上

白烟雨を破りて汽車大和路に向ふ。同じながめの菜種畑も霧につゝまれて絶景更にいはん方なし。天王寺はなほ影をのこして送るに似たり。

浪華寺塔を墨繪にかきすてゝ
麥生いろぞる春のあめかな

川を渡り山をくゞり里を過ぎ田を横ぎりて王子に着きぬ。吉野にゆくにはこゝにて車を下り。ふたゝび高田行に乘りかふるなり。

高田より吉野川のわたし六田まで六里の間はかちの道なるに。高田には車すくなくて。昨日一昨日の晴天には。いかに金力に依賴してもれくるゝ人は得やとはぬ有樣なりしとぞ聞く。金力も

せんすべなきに。造化の力こそ我を助けたれ。細雨霏々たり。花見人の少なかりしによりてたやすく車を得たるのみ。

六田に着きたるは四時にやありけん。前には吉野川おもしろく流れてかなたの岸は雲ちかし。

いにしへの六つ田の淀の川柳
おもかげ遠くかすむ春かな

昔は柳の名所とて歌によみたる處なれど。今は一本も見ゆず。さて吉野にはこゝより渡りて登る路と。今一里かみに上市と云ふ處よりする路と二つあるを。花見にいかあらず上市よりせよと大坂にて案内知れる老人のくれ〴〵も云ひ含めたれば。それに從ひて猶一里川ぞひの道をのぼる。渡舟さしいづる頃は我一人になりて。花見人のつれも見ゆず。雨はます〳〵つよし。吉野の山口我を迎へて舳さきに立てり。





飯貝丹治など云ふ村々すぎて山路にかゝる。駕籠にて歸る人二むれ三むれあへるのみ。山やう〳〵に深うなりて雨やう〳〵に力を減じたり。神や花を守るらん。花や我を待つらん。

山二つ左右に開きて見ゆる限りゝ櫻になりぬ。一歩々々と白雲紅雲つばさを廣げて眼前の世界を滿たさんとす。今ぞ誠の盛にて。雨にぬれまさる色にはひもて烟りわたる露。天上天下唯我獨得の春なり。

咲きうづむ花より外のいろもなし
いづこなるらん三吉野の山

つゞらをりの路をのこして左右前後花ならぬはなく。六合乾坤ことゞく香雪の内にあり。

三吉野のよしのゝ春を見ぬ人や
花を少女にたとへそめけん

花ます〳〵多く春ます〳〵深し。雨にぬれずはいかでか此妙味を得べき。こゝに至りて造化の恩澤ます〳〵高し。

のぼりつめたる處に茶屋あり。こゝより下に見おろすを一目千本と稱ふ。分けこし山路も又花になりて暮れそめたる。何とも云いれず。世は滿足ならずと誰かいふらん。されどかくのみ常ぞと思はゞ又たがふ事もあるべし。

吉野町の福地屋といふに宿る。是もかの老人の道びきぞかし。風呂の中よりながむる花。寢ころびながら見わたす雨。かれも得がたしこれも得がたし。

花はまだいそぐともなき夕ぐれに
　　きくもよしの〻山寺のかね

これやこの年月ながくおもかげに
　　見え渡りつるみよしの〻花





其九　吉野の下

明くれば雨やみぬ。案内者を先に立てゝ仁王門を入る。藏王堂の前に四本の櫻ありて。傳へ云ふ大塔の宮の今はの御宴を開かせ給ひし跡なりと。花ものいはず袖に落つるは露か涙か。

うゑかへて今は若木の山ざくら
　　なれもむかしの春やかなしき

吉野町なは奥につゞきて家毎に櫻菓子さくらづけ吉野葛吉野かんざしなどを賣る。一年の生活を花の時に立てんとするなるべし。

吉水院に詣づ。こゝは南朝の假御所にて。神さびたる玉座。由緒ある寶物。依然として千載の恨をのこせり。花を出でゝ花に入り。感慨つきぬに感慨來る。或は歌人となり或い歷史家となり。男子の腸を斷たしむるは吉野なるかな。

又もとの路に出でゝ谷に下る。如意輪堂にゆかんとするなり。此あたり花深く鶯しきりに鳴きかはして。何とも云はれず。たゝずみては顧み休みては仰ぎ見つゝ。路盡きて堂の門を入る。左に事務所ありて小楠公の歌かゝれたる扉を始め寶物あまた見すると云へど。先年すでに參觀したれば其前を過ぎて。やゝ少しのぼりて後醍醐天皇の御陵と世泰親王の御墓とを參拜す。二もと三もとの櫻散りみだれて。今朝はまだ掃はぬさまなり。

塔の尾のみさゞき寒く降る雪は
なほ花ならぬ心地こそすれ

同じ路をかへりて勝手の社に詣づ。靜の舞を舞ひたるはこゝぞなど案内者かたる。天武天皇の踏み迷ひ給ひしはいづくなるらん。天女の下りし物語は袖振山と云ふ名に其跡を殘したり。花の中道をなほ深くのぼりゆくに。案内者は且那の御足の達者





さよと云ふ。いや達者なるには非ず。花に心のいうげばぞかしなど笑ひつゝ見かへれば。桃か躑躅か。美しきものうちつらなりて險しき坂道をこちへ來るなり。忽ちにして近く早く。我あたりをかすめて影もはるかに行きすぎぬ。十三四のむすめども十人ばかりも隊をなして此日を晴れと出でたちたるは。花見兼ねての神詣でにやあらん。今までほこりし達者の名譽も夢ありけるよ。雲井櫻と云ふは後醍醐天皇の御製によりたる名にて。それかあらぬか今も一本さきみだれたり。其あたりに質朴なる茶屋ありてこゝより見わたせば過ぎ來し處々たゞ一目なり。吉野町藏王堂白雲につゝまれてまがふべくもあらず。名物の葛餅つくらせてあれはこれゝと山の名ども問ひつゝ箸をとる。いと樂し。吉野川もあざやかに流れを見せたり。

子守の社をも拜みはてゝ金峯の社に詣づ。是より右に細道を入

りて西行庵と云ふに行く。案内者曰く。吉野は下の千本中の千本奥の千本とは申せど。それも行きそうもなきお客にほこる詞にて。實は下の千本にとゞまるなり。中のは勝手あたりより左に見ゆる山のを云へど。これも下のには中々およばず。まして奥のは百本にも足らぬ程なれば。必ず腹立ち給ふなよと。それは櫻には限らじなどいふうちに。奥の千本來りぬ。西行庵にも着きぬ。盛は今四五日後なるべけれど。かたへは咲きたるもあり。數はげに多からねど。浮世の外の色香またすつべからず。山彦ひとり鶯に答へつゝあるは。喬木にうつらんとや鳴くらん。やがて出でじとや歌ふらん。（西行の歌あり。曰く。よしの山やがて出でじ身を花ちりなばと人や待つらん）竹林院の庭は名高きところにて。花おほく眺望よく。吉野町のはづれなれば便利もかなひて辨當ひらくは誰もこゝを借る事なり。花見を終りて我歸り着きしは午後二時なりしが。辨當は既に



福地屋より送られて待ち居たり。海魚川魚の鮮なるに。當山の竹の子など取り揃へて蒔繪の重箱を滿たし。酒さへ地造りならで銀の瓶子にたゝへたり。思はざりし晴天に逢ひ。思はざりし酒肴を得て。思ひしまゝの花に醉ふ。我のみや然る。人のみや然らぬ。宿に歸れば落花雪の如く椽を埋めたり。下婢いそぎ來て掃きおかざりしを謝す。人の罪と信ぜし事を我は却りて功なりと賞するも世の中なるべし。今猶ひら〳〵と飛び來ては水飲むコップに浮ぶ。

花に寐て花にねざめて花に醉ひて
花にうたへり何をかのぞまん

歸路は六田の渡に向ひて下る。同じ花ながら昨日は雨中けふは夕日にて。趣おのづからかはれり。なごりは盡きねど山路い盡きて。吉野川の岸に出でぬ。舟に乘りて見返す山には花すでになし。

菜種の上に日影の殘るこそさびしけれ。

六田より車をやとひて行くに。吉野川は猶見ゑ隱れに左りにあり。車のとまる毎に雲雀の聲を聞くもあはれ深し。御所と云ふ邊より暮れて燈火まばらにながめわたさるゝなど。旅心地は一歩ごとにまさりぬ。畝火山やあのあたり。當摩寺やかしこの麓など想像すれど。車夫も敎へず山も語らず。

高田よりは滝車にて。湊町よりは人力車にて。北濱の宿りに歸りしは夜も半ば過ぎたる頃なりき。夢も今宵は花の上を離れぢ。我や蝶にありし。蝶や我になりし。

其十　浪華の花

又の日は大坂の友だち訪ひくらして。歸り來れば火もともりぬ。生魂の夜櫻見にもかずやと誘ふ人のあれば。散歩がてら伴はれ出づ。人まひかれ人におされていつしか身は社頭にあり。火影白





きは花なるべし。見んとてとまればつき飛ばされて身は又花なき處にあり。木蔭を取りまく掛茶屋數も知らず。客よぶ聲は枯れはてゝもなほにぎはし。花見に來しか。人見に來しか。我ながらわからず。

又の日は猶こりずまに人見んとて。櫻宮さして行く。つれは女も交りて我ともに四人。くもりつる日もよくありておくれさきだつ車ども路に滿てり。

宮は堤の中央にありて。東にはうちひらけたる菜種畑をひかへ。西には綠あふれたる淀川を受けて。風景たぐひなし。畑の岸には茶屋軒を連ねて菜種見る人に酒肴をすゝめ。川原の方には葭簀の小屋掛に百萬の提灯をならべて樽鳴り盃躍る醉客の座敷に供ふ。花は靑葉がちなれど猶おそからず。陸よりよするもあり船よりよするもありて。笑ふ聲謠ふこゑ。こだまに反せり。

我は菜種に向ひたる家を借りて携へたる酒肴をひらく。昨夜にこりて花見んとは思はざりしに。人見ぬ方に此花を見るこそおもしろけれ。太鼓の音遠近にきこえて日も傾きぬ。

出でゝ堤をあるけば芝生には少女たちの赤き黄なる襦袢一つになりて狂ひあそぶあり。桃山吹の散りかゝるにも似ていとうつくし。

今夜は日記かゝんとて机によれば。何やらんさわがしき聲す。櫻宮より醉客のせて歸る舟にやあらん。

其十一　須磨舞子

けふは立たんと曰ふ。いや立たせじと曰ふ。客は歸路を急げど主人の名殘惜むを如何せん。客まだ諾せねど主人すでに車を命じて須磨に遊ばんとす。我もにくゝは非ず。神戸行の滊車は二人を載せてはや長柄川を渡る。





目の及ぶ限りは菜種にて。平原十里風も霞も皆黄なり。白からば雪とも見まし。青からば水とも見ましだゞ絹の上を口なしもて染めわたしたるやうなり。

神戸に着きては山陽鐵道に乘りかへて須磨にゆく事なるが。其發車までは二時間も待たねばならず。先づ湊川神社に詣でゝ來んとてうちつれ行く。花もかれこれ見えたり。いにし日の吉野けふの湊川。花は異なれど感慨は優るとも劣らじ。

嗚呼忠臣の碑文よみをはりても時間來らず。茶店に休みてもなほ來らず。町に出で川をわたりて行くともなしに兵庫の停車場に到りぬ。あなおぞまし。須磨には近くなりたれど。時間は更に遠くこそなりぬれ。須磨に着くは同じ列車にて。賃錢は神戸にて乘るも兵庫より乘るもかはらぬゞかし。

須磨にてい海月樓といふにて晝飯する事に定む。庭に幾本の櫻

さきみだれて海水おもしろく前に湛へたり。賤の女ども手ん手に籠を提げつゝ渚に出でゝ貝拾ふも見ゆ。腰蓑したる男に女もまじりて引きよするは網なり。されど魚のあがる頃は遠く引き去りて窓からは見えず。あはれ銀の鱠の砂にはねるもゆかしきに。

こゝより西の方五六町も離れたる山際に敦盛塚あり。苔むしたる五輪の前には誰が手向けしか。つゝじ櫻の筒にさしたるが大かたは枝のみを殘せり。二十餘年榮花の春をなほよく吊らはしむるは。此一片の石碑と一谷の山れろしのみ。我より先に五十ばかりの巡禮ありて稱名數返となへゐたるが。我等を見て俄に容を改め。無官太夫討死のさま。魂魄の夢に來りて歌を授けし物語など。辨舌さわやかに說き出だせり。一句毎に稱名を挾みつゝ熱心なるさまは狂人とも見ゐず。あゝ彼の胸中には又人なかるべ





しさても英雄なるかな。

こゝを去り海月樓の前を過ぎて十町ばかりも東の方に入れば須磨寺あり。門前には若木の櫻盛にて此頃植ゑつけたるも多し。寺には寶物ありて。青葉の笛をはじめ敦盛の首包みしと云ふ熊谷の母衣ぎれなど。ひとあはれげに僧の說きしめす。本堂の床几に腰うちかけて見わたせば。名所みな眼界に集まりて盡きもせず。

古寺のわか木の花にいまもなほ
吹くかうしろの山おろしの風

何となく須磨の古寺きてみれば
むかしに似たる春の夕暮

日も傾きたれば再び舞子行きの瀛車に乘る。須磨は名所なれど風景は舞子の方がまされりと人毎に云ふなり。

舞子は須磨と隣して呼べは答ふる如し。宿屋は停車場より十町あまりも濱手にあり。道すがら右に名高き松原を見つゝゆくに。菩薩の舞ふが如きあり。仁王の足蹈み立てたる如きあり。東に靡き西に靡き。臥すもよろめくもありて。千態萬狀なる筆にも及びがたし。先年小兒の百日咳を病みしに。醫師すゝめて大磯の松原を朝毎につれあるけと曰へり。今健康なる小兒もかゝるけしきを見ば如何によろこばん。古葉かきよする里人までさながら畫の如く能の如し。

宿りをば龜屋と云ふ。欄干によりてうち向ふ海原。旅の愁のみかは人間界をも洗ひつべし。うしろには下婢の茶と浴衣とをもてこしも知らざりき。

夕がすみ薄くかけたる淡路島はまづ前にあり。右に離れて小さきは小豆島なるべし。左に遠きは紀伊の山なるべし。明石も浦つゞきに見やられて海人の家居もあらはなり。出で入る舟の帆影うすゞみになりて暮れゆくと見るまに。それも消えてこゝかしこに漁火の浮き沈むも物さびし。『八島』の謠にも似たり。『絃上』の謠にも似たり。身に愁なくして光源氏の境界に逢ふ。此幸福はそも〳〵誰が恩澤ぞや。明石の燈火は星の如きに。淡路の燈臺ひとり北斗に似て大きくかゞやく。

古もかくやあはれにながめけん
夕暮かすむ須磨の浦波

友ははや寐たり。波の音のみ歌おもふ枕にしたしみて夜もふけぬ。

其十二　神戸の友

次の日は神戸の友を訪はんとて。獨り瀛車よりわかれて中山手通といふにゆく。

六年わかれし友にあひて往事をかたるも旅中の一快事なり。いざなはれて生田の社に詣づ。籠の梅と云ふは青葉すゞしげに榮えたり。敦盛萩と云ふは枯枝のもとに芽を見せたり。この邊は源平の持切なりとて打ち笑へば。持切も流行の變遷あるべしとて友も笑ふ。先日の祭禮に能の興行ありしとて。拜殿に假造の橋掛をつけたるが。今もうのまゝにて。落花の吹きよせられしなどわはれなり。

ろれより布引の瀧見にのぼる。下なるを雌瀧。上なるを雄瀧と云へり。一幅ひろき布の如くに落ちくるは名に背かず。山は松もて埋めたるが。其かげには蕨とりに出でたる女どもこゝかしこに見ゆ。東に高く聳えたるは摩耶山にて。ろれに登る路もこの山の麓より二つに分れてつきたり。瀧の末は生田川にて菟原と八部との郡堺をなせり。見るもの聞くもの名所ならざるはなく。古戰





場ならぬはなし。

生田川ながれてすぎし古へを
うつすもうれし摩耶の山影
須磨もよし舞子もうれしそれならで
けふこそ見つれ布びきの瀧

布引の瀧の白絲くりかへし
くりかへしてもあかぬ春かな

歸りには諏訪山の何がし樓にのぼる。神戸市街の全圖いたゝまれて眼中に在り。見て來し生田の森はわれにまだ知らぬ和田岬はかなたにあり。友は敎ふ。伊丹の酒。諏訪山の田樂。この友の饗應にあひてかの天然の美妙をたのしむ。又時あるかな。

其十三　餘興

大阪に歸れば火ともし頃になりぬ。主人は魚を鱠にして待ち居

たり。羹にせよとて鯛おくる友。鍋にせよとて肉おくる友。あつまり來て語る間の短きを惜しむ。我醉ひたれど主人猶ゆるさねば。更に吉野の花を評し舞子の松を評するほどに十二時も過ぎたり。おもへば明夜孤燈の下に獨吟するさびしさや如何ならん。

其十四　歸路

瀧車は大阪をはなれぬ。送り來し人々は影うせぬ。雨くらし。窓より見ゆる山々もけふはものがなし。十二時過ぎて京都につきぬ。さても壬生狂言の興行中と聞きてわざ〳〵見によりたるに。雨天には休むと云ふこそ失望なれ。あす晴るべしとも受け合はれねば。此度は見のこしてかへらんとす。かへす〴〵もいとくちをしさはいへど天道は滿つるを缺く。我すでに嵐吉野の滿開にあひて又其上に壬生狂言を見んとするは。慾の增長せるものとぞいふべき。都踊は今夜にて終れりと云ふ。さらば之にてもとて暮るれば再び祇園町に向ふ。明日の夜は家にかへりて是も話の種にせん。見しもうれし見ざりしもかなしからず。

## 片瀨の波

殘暑は東京を襲ひて閑人と病人とを瀧車に送る。余も送られたる一人ながら。暇なければ病もなし。日頃虛弱なる妻子を海邊に伴はんとするなり。

八月十五日の眞晝中相州片瀨村に着く。柏屋の前に車をとゞめて部屋あるかと問へば。澁々に答へて案内するを見るに。西側の室にて蒸風呂も外ならず。火あぶりと云はんか。お七ならぞ。釜入といはんか。五右衛門ならず。罪つくらぬに此焦熱地獄に入る。想像のまゝならぬ世を如何せん。下婢を責めても無き部屋なればせんかたなし。此上は何がしの權力に訴へざるべからず。

湯湧きたりと云へばそれも浴みつ。膳來たればそれも食ひつ。日影はます〳〵怒りて窓にぞ迫る。いざ潮あびて來んとて磯に出づれば。折れかへる波われを迎へて言葉をかはす如し。あの綠なるこそ江島よ。富士の山の黑きを見ずやなど云へば。小兒の喜ぶこと限りなし。濡れたる砂には昨日習ひし『いろは』も書くべし。乾ける砂をば集めて箱庭も作るべし。明日も明後日も汝がものぞ。

宿に歸れば部屋かはりて三階の東にあり。龍口寺の燈影も涼味を添へ。向の松山も窓に對して立てり。五六年のむかし

江の島の燈火あをく暮れそめて
片瀬に落つる夜嵐の聲

とよみたるも此家に泊りし時なるよ。

寐ころびつゝ隣室の物語きくも樂しきものなり。南に鶴龜をうなりだすあれば。北には忠臣藏を始むるあり。碁石のきしる音。盃洗の鳴る響。相和して旅心地にぎやかなり。小兒も珍らしとや聞くらん。カバンの千代紙出だし入れつゝ眠らんともせぢ。

翌日は江島に遊ぶ。海の中道つくる處に鳥居ありて。兩側の店より休め〳〵と勸む。小兒の爲には開闢の新世界。何事かは驚きと喜びとの種ならざらん。其細工は屏風かんざしなど一つ二つ土產に貰ふを上なき樂しみとせし事なるに。あの店もこの店も。其物もて埋めたれば。美しさに目を奪はれてあれよ〳〵とあきるゝのみ。小兒の洋行を目前に見るもいとをかし。

嶮しき石段を登りては休み。休みては登る。風とき〴〵に汗を拂ひて涼しさ物に似ず。小兒は唯石段の高きを一つ二つと登りゆく面白さに暑さも知らず。添ひゆく智識の數も此石段の如くにや在らん。

岩屋の方に下らんとする岸の上に茶店あり。遠目鏡をすゑて海

中の烏帽子岩など見る便りとす。富士も水天髣髴の間に頂きを見せたり。小兒は讀本の畫にて見覺えたる舟を現在に數へなどす。帆かけたるもわり屋形のもあり。釣に出づるもありてこなたの松の枝に見え隱れするは。父にまで歌よめと促すに似たり。

波の色は同じみどりのわたの原
こぎゆく舟のさま〳〵の世や

暫し休みて岩屋に下る。波は洞の口を浸して神代の聲を留め。岩は門の柱を削りて造化の工を遺す。闇穴道の壁の左右に點じ連ねたる燈火の光は。背なる幼兒の眼を引き。夏猶寒き苔の軒より滴る雫は。物めづらしき家婢の心を洗ひたり。穴を出づれば例の漁夫ども待ち迎へて貝取らせと云ふ。うなづけば尻を逆樣にして渦まく波に躍り入る。忽にして攫み出でたる蛍榮螺は褌に挾みて持ち行きたる種と知らねば。小兒のうれしがるも理りなり。





一人に取らせたりとて右より左より餓鬼ども集まり來て。我も〳〵とねだる。されど馴れてひつこきものゝひとり海士の子のみならんや。

めぐり〳〵て鳥居に歸れば。正午も餘程すぎたり。岩本によりて午飯す。鯛の洗ひ海老の具足煮。かの清風に吹かれつゝ此鮮魚を味ふ。天未だ余が樂しみを央にせず。

こゝより獨りわかれて更に社務所に到る。江島緣起を見んとするなり。かねて神奈川縣官の紹介を經たることなれば。いと懇なる待遇を受けつゝすゞしき窓に紫の服紗を披く。何の幸福か之に加へん。緣起い五卷にて頗る古色あり。表裝の新らしきい安政の波にひたりしを修覆せし爲とゞ聞く。今も一枚毎に糊はがれてばら〳〵になりをるが。遂には續き分らずやならんと氣づかはし。

まづ天地開闢の始めより此島の成りたるまでの事をしるし。次に緣故ある行者名僧の傳を載せ。靈驗いやちこなる神德を述べて一部を終れり。畫いと美しく。想像の富みたるは何れの緣起も然らぬは無けれど。今見るものには殊に心ぞ引かるゝ。中にも天部鬼神の黑雲に乘じ怒濤に立ちて。石を運び岩を裂きつゝ此島を造りなせるさまは。奇想天外より出でゝ。妙味云はんかたなし。近著謠曲通解の種をカクシに納めて社を下りしは二時間の後なり。

遠く片瀬の濱を望めば。緣の紙に點うちたる如く。海水あびる客は頭をならべて波間にあり。近づくまゝに。砂の山。藻の植木して遊び居る小兒をも見出だせり。父の作りし『松島』の唱歌をうたひゐたるゝ。彼も山と海との差別や知るらんと先づをかし。生きたる貝のはひあるくを見てはキシャゴがあるくと手を拍ちてめづらしがる。其ことわり說き聞かすれゞ家を連れあるくとて更に驚く。物干竿を縫ひあるきし庭の蝸牛は怪しからずやとます〳〵をかし。昨日は恐しとて泣いて逃げたる波の姿も。今日は馴染みて遊び友だちとなる。小兒のみにはあらじ。波のみには非じ」。客一度に歸り集りて。余が部屋にも行燈來りぬ。枕を呼びて仰向に寐たれど。天井には古びたる西洋紙の張りたるがあるのみ興もなし。額は一鶴橫秋風の文字あれども。面白しとも見ゑず。曾て大和の多武峯に遊びて花中屋に泊りしにうこの天井には當時名家の詩や歌を貼り交せにしたり。夕暮浴すみて飯をはる後讀むともなしに見もてゆく。いと徒然あらぜ。宿のあるじの用意はかゝる所にこそあらはるゝものを。

草臥と涼味とは魂を夢路に運ぶ。枕に筆あれども忘れたる如く。皿に餅あれども捨てたるが如し。三更驚きさめたれど茶の冷え

たるを如何せん。手帳を披きつゝ波の聲を聞く樂しみ。妻子も知らず隣客も知らず。唯われと星と風とのみ。

なれ〳〵て結ぶ片瀬の波枕
浮世にかよふ夢もゆるさず

夜は明けぬ。顏を洗ひては膳に向ひ。腹ふくるれば海に入り沙に寐ころび。疲るれば歸りて枕に親しむ。旅は物うき習ひなれど。妻子を携へたれば思ひやる事もなし。嗚呼一生い夢か現か。紙屑本箱の間に身を埋めたる昨日の我は。いつしか此荒海布くさき空氣の內に閑天地を送る。田舍鰻頭の美味亦忘れがたき一つなるべし。

今は小兒の色鳥にも劣らず。波を愛する事親友にも下らず。名殘はあれど日數重なれば別れを告げざるべからず。車を連ねて七里濱にかゝるに。松風は健康の家づとを運びて跡おひかくるに似たり。

此度は長谷の觀音にも詣でず。大佛にもよらず。鎌倉を横ぎりて金澤に遊ばんとするなり。朝夷切通はめづらしからぬ處ながら。風景急に變はりて山となる。兩岸の草花さきみだれたる間を水の落つるなど又興あり。小兒いあれよこれよと。嶮しさも忘れて撫子螢草など摘み集めゆく。登りつめたる處に例の茶屋ありて。苦むす巖を壁としたるい。更に小兒の新世界なり。一抔の清水一盃の切鮓飯。その味いふべからず。

飛石の金龍院といふは金澤八景を見るによき處なり。寺に入れば老僧煙草盆引き提げ來て。うしろの高き山に案內す。一枚の彩色畫圖を眼下にひろげたる心地して。痒きに手の屆かぬ處もなし。

僧は茶を配りはてゝ八景を指し示す。先づあれに見えたるは野

島の夕照。その左なるが平瀉にて。汐干に貝拾ふさまを落雁には見なしたり。かなたなる。松原い乙艫にて。今も歸帆の景色あり。こなたに人家あるは洲崎の晴嵐。明神の森なるが瀨戸の秋月。小泉の夜雨い霞のおりたる樣を云ひ。稱名の晩鐘は聲を賞するによりて起れる名なり。この右手に見ゆる浦邊が內川の暮雪にて。是よて八景は備はれりといとねんごろに敎ふるは。地圖の前に立つ小學先生にも似たるかなと小兒を見かへれば。遠眼鏡に見ふけりて耳をも向けず。

車は彩色畫圖の端に線を引きて東屋に着きぬ。水は山を載せて欄干に當り。山は水を含みて箱庭をなし。夕日に網干す舟。秋風に帆を張る船。畫の如く詩の如く仙境の如く神界の如し。

暮色水に落ちて數點の燈火星に似たり。あはれあの影には世渡りの絲や引くらん。草鞋や打つらん。歌人の材料を助くるものとも彼は知らじ。言ひ聞かせても分るまじきこそ樣々の世の中なれ。

枕とる窓の火影の堪へぬまで
　洲崎の松に夜風ふくなり
岸かげにつなぎすてたる海士小舟
　うつ波白く夜い ふけにけり

いでやつかれたり。蚊屋もてこよ。旅の枕は今宵ぞ名殘。小兒の土產は色の黑いと髮の赤いとで十分なるべし。明日は鎌倉の一時五十四分の瀛車に乘らんとぞ思ふ。

## ぬけまゐり

瀛車は熱田に着きぬ。再び人力車に送られて身は濱の錢屋にあり。出で入る舟。ゆきかへる波。まづ旅心をゆたかならしむ。余はこ

丶より小蒸氣船に乘りて四日市に渡らんとするなれば。時刻待つ間に熱田神宮に參詣す。宿より七八町もあるべし。廣き境內。神さびたる立木。おのづから信心肝に銘ずる宮居のさまなるに。正殿は此度新たに造營中なれバ。白木造りの千木高く仰がれ給ふも近きにあるべし。

二時過ぎて赤穗丸といふに乘る。波おだやかにて疊の上を走る如く。鈴鹿あたりの遠山なるべし。雪を戴きて舟の窓にあたるも畫の樣なり。波にきらめく夕日の影を橫ぎりて舟い四日市に着きぬ。此時遲く彼時早く。津行の滊車は笛の音高く我を殘してかなたの空に出でゆきたり。舟をや恨みん時計をや恨みん。さりとては又滊車をや恨みん。『伊勢人は僻言しけり』と泊りを勸むる宿引きとらへてつぶやきても如何はせん。

白木屋と云ふに泊る。海邊のしるしにや夢あたゝかにして旅枕





わびしからず。

明くれば十二月十日。八時三十分の滊車ゑ乘る。河原田。高宮。龜山。下庄。一身田などの停車場を過ぎ行くに。大神宮神苑の開苑式に列なる人々と。其賑ひを觀んための參宮者とを合はせて。乘客いよ〳〵夥たしく。近づくまゝに雜沓を極めたり。小言は謂はれず。我も其一人なるを。

津に着きて車を雇はんとするに。常ならば五十錢にて山田まで行くと聞くを。今日は七十五錢ならでいと云ふ。ゐれも遲からば出拂ふべしなどいふに。術とは知りながら步行して及ぶべき里程ならねば。約束を定めて乘る。

津の町を離れて岩田川なぞ渡りゆくに。阿漕浦は此邊なりと聞けど。行く先遠ければ得立ちよらず。雲出川にかゝる頃。風にはかに吹き强りて礫の如き雨顏を打てば。あなやと廣げし蝙蝠傘も

一吹に吹き折られぬ。目も明けられず物も言はれず。

松坂に着く頃はやう〳〵穏になりて日の目も見ゐたれど。風の寒きは似るものなし。此地は鈴屋本居先生の住まれし處にて。我少年の昔國學ゑ志さし初めつる日より。書中に夢中にしば〳〵出あひし土地あるのみならず。先生の墓地靈社さへ現存すれば。一泊して其遺跡をも探らばやと豫ねてい思ひ居たれど。來て見れば先が急がるゝぞせんかたなき。『山室山神社道』の捧杭は町の右手に高く立ちて我を待つが如し。今夕櫻の落葉を踏みて水を捧ぐる人ありやなしや。

櫛田川をも過ぎて明星の宿にかゝるに。家毎に國旗をひるがへしたるは彼開苑式を祝ふためなりといふ。『明星の茶屋の女によい(宵)もあり又首筋に垢付(曉)もあり』といふ古歌はあれど。今はさるさまに賑はしき家も見ゐず。冬枯の頃なればにやあらん。





宮川はもと舟渡しにて御蔭まゐりの人數をしらべし處といふに。來て見れば大きなる橋うちわたる世の中とは爲りぬ。彼も時なり此も時なり。唯かはらぬは此清淨なる川水と。彼赫奕たる神威のみ。

山田に着けば黄昏も過ぎたり。外宮前の有瀧屋といふに泊る。女來りていざ湯にと案内すれば。衣ぬぎすてゝ湯殿に入るに。水桶は有れど風呂は見ゐず。さては馬琴の『物の名も處に依りてかゝりけり江戸の戸棚は伊勢の据風呂』と戯むれしは是なるよと心得て。戸を引きあくれば湯氣あたゝかに待ち居たり。かの歌しらずは第二の膝栗毛をも現出すべく。近眼の身にゝ危かりきと唯心中に打ち笑まるゝのみ。語る友なき獨旅こそさびしけれ。

十一日は起くる直ちに外宮に參詣す。朝日花やかにさしのぼりて神木の梢に霞みわたれる。先づ心すみたり。境内にはいと廣や

かなる神苑ありて。梅櫻なぞ植ゑわたし。芝生をば小松もて裝ひなしつゝ。人工を假りて天造を助けんとする企も成りたるに。雲を凌ぐ杉の梢よりは數條の綱に萬點の酸漿提灯を懸けて池の向にわたしたるが。滿目の綠に映じ合ひて美しさ限も知らず。今日は此苑内にて此地の人々能樂を奉納するとて。舞臺を組立て幕張りわたしなど。準備も大方整ひ居たり。

午後一時よりは内宮にて神苑奉告祭を行いるゝとて。余も參會すべき特許を得たれど。旅中の事とて禮服も持たず。土地の能が殊に見たければ。終日外宮にとゞまる事に定めて。農業館や天岩戸やと見わるく。

待てども〳〵能は始まらず。正午も過ぎぬ。晝飯すまして行けば。今ぞ翁は濟みて三番叟の終る處なりし。それより鶴龜あり橋辨慶あり熊野あり。間には狂言もありしが。東京の目にてこそ不完全の點多しとは感せらるれ。裝束と云ひ役者と云ひ。あれほどまでに打揃ふ事は容易ならじとぞ思ふ。況んや何方にも携へ行きて一夜の間に組立てらるゝ舞臺を共有し居るなぞ。東京人の企て及ばぬ手際と熱心とあるをや。

役者の巧拙をば評せじ。囃子方の優劣をも論せじ。唯面白きは群集の中に交りて。謂はゆる棧敷評判を聞きたるにあり。甲曰く。彼奴は四五日以來職を休みて稽古にかゝりしが。流石はうまいものあり。乙曰く。あの男い不斷のとんまに似ず。まじめで狂言する内が面白い。丙曰く。いつの間にあんな衣裳を拵へしならん。丁曰く。御辞儀もせずに引込む奴があるものか。御辞儀もせずとは。鶴龜のシテの無言にて歸るを評せるなりけり。

夜にも入りぬ。燈火の光り晝の如く。數十本の花火は柳とあらはれ星と散りて。彼方も賑はし。此方も賑はし。鳥居の内を望めば燈

籠の影見ゑ隱れして夜色神さびたり。

十二日は内宮に參詣せんとて朝とく宿を出で。古市相の山などいふを過ぎゆく。此邊にゝお杉お玉とて路傍に小屋掛して三味線ひきつゝ物乞ふ女のある由は聞き居たれど。今ゝ一般の參宮なき頃とて影も見ゑず。宇治の町に入れば。齋主の宮の御旅館や大麻局や神風講社やと神々しき建物あまたあるなかに。何々太夫の札打ちたる家ゝ軒を並べて榮えし昔を思はせたり。町盡きて。白木造りの大橋あり。宇治橋と云ふ。此下を流るゝは五十鈴川にて。白布を晒し列ねたるが如き水の清く湛へたる。汚濁の影をば塵ほども交へず。昔し倭姫命の御裳を洗ひ給ひしに依りて御裳濯川と名づけたるよし倭姫世記に見ゑたるも。此川の事なり。前には千年の緑深く聳ゑて內宮の鳥居高く仰がれ。神路山そのうしろを護りて天然の玉垣をなしたる如し。心まづ自ら改まる



を覺ゆ。

天の戸をいづる日影をこゝに來て
をがむも神のめぐみなりけり

五十鈴川神代ながらに行く水の
きよきを民の心ともがな

渡りはつれば神苑廣々として先づ俗氣を隔てたり。こゝはもと神官の家など多く並び立ちし處なるを取り拂ひて。斯く清淨の地と爲したると云へば。神苑會の事業こそ神慮なるらめ。

鳥居を入りて木深き方にと稍や行けば。五十鈴川右に流れて參拜者の手洗ひ口嗽ぐ處あり。下り立ちて兩の手して結び上ぐるは十人二十人同じ樣なり。天に聳ゆる神杉の中を奥へ〳〵と行きて。板垣南御門といふに到れば。宿衞小屋ありて白裝束したる神官の詰め居るさま嚴肅なり。參拜所の正面には白布を垂れて

神前を隔て。其前に清き莚を敷く。人々こゝに膝折り伏せて賽錢を莚の上に供へ。拍手低頭して拜み奉るあり。或は大祓の詞を高く唱へ。或は默禱に時を移すもあり。垂れ布の隙より仰ぎ見れば。又鳥居あり。御門ありて。幾重の奥に神はましますらん。窺ひ知るべからず。此時の心中何を以てか之に譬へん。『かたじけなさに涙こぼるゝ』とは古人の實情。げにもと思ひあたらるゝかな。

今日も內宮の神苑にて奉納能樂あり。昨日は有志者の發企にて。今日のは神苑會の催しにかゝる。東京の觀世淸廉これを勤むるなり。小鍛治三輪土蜘蛛の三番なりしが。見所は昨日の式場にて。老若男女の群集せる樣神もめづらしとや御覽ずらん。雜沓をば巡査これを制して猥りに評語をも立てさせず。かの土地の能とは事かはりていと嚴めし。皷の音。笛の聲。こだまに答へて人間界の遊とも思はれず。



あなあはれあなおもしろと謠はれし
　昔や神もおもひいづらん

今夜は神苑會の櫻井飯田二氏より招かるゝ事ありて快宴に時を移し。夜ふけて宇治橋の澤潟屋を出づ。寒風面を剪りて四望はや寂々たるに。古市ひとり燈影絃聲の中央に立つも。猶大神宮の御蔭なるべし。

櫻井氏は曰はれたり。二見に行くならば三時に立ちて日の出を見よと。余も其敎へに從はんとて歸宿せしに。俄に風を引きて頭あがらず。四時をも過ぎぬ。夜も明けわたりぬ。いと〳〵くちをし。強ひて起き出で顏を洗ひて朝飯を終れば。やゝ快くなれるやうあり。いそぎ身をケット包みにして宿を出づれば。車は二見に向ふ。

右に神路朝熊の山々を振りさけ見つゝ寒風を剪り行けば。汐合

橋といふに出づ。五十鈴の下流にて。潮のさし込むゆゑの名なるべし。右も左も唯渺々たる大河にて。風の力ことに強く。手を放さば帽子もケットも持ちゆかれんとす。

貝細工など賣る店の前を過ぎて海邊に出づれば。右に海水浴場賓日館などいふ建物あり。左は波うちぎはにて。雪と散る色。雷と轟く聲。客なき頃とて其働きを止むるにも非ず。

山に沿ひゆくこと暫くにして路盡きたり。かの注連引きわたしたる二つの大岩。波を隔てゝ前に當れり。此間より深紅の光線を見出でたらん心地いかにぞや。遺憾さらに彼海よりも深し。

こなたの岸には鳥居を立て幣を置きて朝日の拜所とし。又小さき祠ありて興玉の神を祀る。其前に至れば白衣着たる番人居て榊と幣を着けたる銚子を持ち來り。神酒をいたゞけといふ。やがて土器を下に置けば。輪注連と陶器の墓蝦とを出だして之を興





玉の御前に供へよと云ふ。唯命これ諾して五厘の銅貨と交換すれば。忽ちに三方の上にのぼれり。知らず此かへるは毎日幾度三方を下りて番人の手にかへるらん。

あまりの寒さに暫しも居られず。車を急がせて歸路に就くに。風は向風にありて苦しき事かぎりなし。歌よまんとすれども考へをさへ何くへか吹き去りぬ。されど

夏ならば夢を吹かせて一夜ねん

二見の浦の松のあらしに

筆とりて童あそびに畫きたる

二見の岩を今日見つるかな

山田にかへり早晝にて出立す。風ます〳〵強し。櫛田川を渡る頃は日既に沈みて灰色の空そゞろ寒きに。雪白き鈴鹿山も遙かに見ゆ。

櫛田川かはかせさむし松坂の
わがゆく里に家もあらぬか

町に入れば暮れはて、。餘飩の行燈と湯屋の煙とのみ暖かげなるも。一泊をすゝめがほなり。

鯛屋といふに車は止まれり。女ども出で來て口々に泊れ〳〵と強ひて止まず。東海道中には斯かる事いまは絶えたるに。久しぶり伊勢路にて膝栗毛の復習する心地せらるゝもをかし。

山の影黑く家の影黑く。唯光あるゐ星と燈のみ。車夫も言なく我も言なく。車輪のめぐると共に一歩々々と更けわたる。

十時頃津の町の若六に着きぬ。手は氷れり足は氷れり。湯殿に案内せられしうれしさは家にして如何でか得べき。酒を命じ肉を鍋にして半日の寒氣今は全く忘れはてたり。櫛田川の川風もこゝまでは及ばじ。鈴鹿の雪もこゝまでは來らじ。





十四日は曉を侵して瀧車に乘る。此度は四日市の瀧船を用ひずして關西鐵道より東海道に向はんとするなり。東の空に紅色長く横はりて見る〳〵圓鏡の浮び出でたる。何よりも先づ勇ましく。龜山。關。柘植。石部など打ち過ぎて。草津より更に東海道に乘り替ふ。近くは琵琶湖の青きを望み。遠くは伊吹山の白きを仰ぐも興深し。

美濃路にかゝれば地上すでに斑白の色を見せたり。風は窓に迫つて耳を刺す如し。瀧車漸く濱名灣を過ぐ。夕陽波を燒き砂を染めて。松の色舟の影さながら畫なり。名殘をし舞坂も跡になりぬ。望み多し濱松も前に來りぬ。今夜は此地の朝陽館に宿る。

思へば今朝は朝日を右にして伊勢を出で。今夕ゝ又夕日を右にして遠州に入れり。忽にして雪をながめ。忽にして綠を望み。忽ちにして山。忽にして海。この不可思議なる人界の力を借りて。かの

變幻自在の神界に往來す。歳末文債をのがれん爲のぬけまゐり。果して功あからずや。是また大神宮の御めぐみに因るのみ。

二十六年

## 富士川舟

多忙々々實に多忙。この多忙の身をよそにして遊覽に出かくるは。如何に甲斐の山水に忠の者ならずやとは。二三日前山梨の一友におくれる文なりき。昨夜も殆んど眠らずに執りたる筆をやう〳〵差し置きて。時計を見れば既に九時なり。滊車の時間は九時五十五分なるに。新宿ステーションまで行くには四十分内外を費やさゞるべからず。早く〳〵と叫べば。妻は驚きてズボンを持ち來り。下婢はあわてゝ車屋に走る。地圖は手拭と共に小カバンに押し込まれたり。實に之を明治廿六年七月十九日の事とす。ステーションに至れば。時計の慈愛なる。我爲に十分を餘して心





靜かに乘込ましむ。暫くして鈴鳴り笛響き車輪運轉を初めたり。片手にポッケットを探るにナイフなければ。先づ鉛筆の先を嚙みくだきつゝ。手帳のゴムを引き延ばすもいと樂し。

十一時過ぎ八王寺に着き。午飯もそこ〳〵にして人力車に乘る。村又村里又里。たゞ熱塵の中に送迎するのみ。黄なる團扇をかざせる人。栗の青葉を背に挿す馬。かれもこれも炎天圖中の好材料ならざるはなし。

蒸されたる粟飯は堆き雪の色と相映じて美しき山をなし。瀧の如き白糸は引かるゝあり繰らるゝありて少女の歌は其中にひゞきわたる。是れ途中到る處に見る蠶事の景況なり。耻づかしや旅人の水なす汗もかの國うるほす汗には及ばざる遠し。

小佛峠も辛うして越えはてぬ。相摸と甲斐との境なる境川をも渡りぬ。夕立の雲晴れて風すこし親しみ來るに。車夫力を得てや

う〳〵足を早むかねてい吉野驛にて許し給へといひしを今は上野原までゆかんと云ふ山梨縣に入りてからは道もよくなりたり。

上野原の若松屋に宿る蚊と蚤と暑さとに三方敵を受けて終夜寐もやられず手帳ひきよせて日記かゝんとするに行燈さへ油盡きて消え果てたるこそ無情なれ。

二十日朝五時車にて立つ近道なりとて桑畑の中を行くに時ならぬ雲雀をちこちに歌ひて日はまだ怒を見せず鶴川を渡り桂川を左にしつゝ山にそひゆく道すがら撫子百合など唯おもしろく咲き出でたり鳥澤と云ふ村を過ぎて岸盡くる處に至れば危き橋あり柱なくて高く空に懸かれり名高き甲斐の猿橋とは是ぞと車夫をしふ欄干に倚りて見れろせば數十丈の底に碧潭の渦まき流るゝ色人をして夏なほ寒からしむ橋をわたれば猿





橋宿にて橋をば古名のまゝサルハシと稱へ宿をば音讀してエンケウと稱ふるい人の知る處なり大黒屋といふに休みて繼ぎかふべき車夫ありやと問へば出拂ひて一人もなしといふ馬車はいかに客すでに一人あり今二人あらばと答ふるは余に二人前を拂へとのこゝろなるべし猶他に客も出來時刻もやゝ移りたれば馬は一鞭あてられて此宿を發す乘合は若き商人体の男と割鉦の如き聲の女と唐金色の娘とに余を合せて四人なり鳥羽の僧正の筆勢か十返舍流の語氣を借るに非ずんば文にも歌にもなりがたきを如何せん若き男は花咲なぞいふ村を過ぎて十二時前黒野田に着く猿橋より四里餘といふ是よりが名高き笹子峠なり十三四の子供を荷持に雇ひて跡になり先になりつゝのぼる表衣は黒野田にて荷の中に入れ靴をば草鞋に履きか

へたるに忽にして流るゝ汗はチョッキを奪ひ遂に肌襦袢をも剝ぎ去りたり半ば登りて三軒茶屋と云ふに休む三杯白銅一顆にも足らざる氷水東京にてこそ廉ならずともいふべけれ價の數に入るべしやは頂上に達すれば冷風面を吹きて水の如く恰も此苦熱旅客を慰むるに似たりたゞ何くを見ても夕立雲のかゝれるありて眺望の便を得せしめざりしを憾みとするのみ黑野田よりこゝまでが一里くだりも又一里なりと云ふ。

くだるに從ひて道更にあしく大石縱横に散亂し之を傳ひ之を踏みゆくなど疲れし足には苦し昨年の山崩れにて家おし流しつるあたりと聞くも唯ならず下り口に茶屋ありて三國一といふ醴酒を賣る旅客行商こゝに集まりて舌打しつゝ飲むもあり。飲みはてゝ家のうしろの谷川にて顏あらふもあり余は草鞋の紐をしめ直しなどす。



下り終れば立塲あり駒飼と云ふこゝより馬車にて勝沼に行く。日川の水左に低く流れて岸高く路あやふし勝沼は甲府の四里手前にて川むかひの岩崎と共に葡萄を以て名高く其町に入らんとする道の左右は見わたす山として畑として綠の玉を懸けざる所なし。

乘合の客ために指さし示しつゝあの岩崎い粒の大なるを以てまさりこの勝沼は性のよきを以て勝つなりいでや瑠璃秋風に肥ゆる日の見事さを見せ參らせばやなど物語るほどに薄暮勝沼町に着き友人の家にやどる涼味一掬また昨夜の寢ぐるしかりしに似ず。

廿一日今日は武田氏の古戰塲といふ天目山に遊ばんとて處の人の案内につき未明に勝沼を出づ昨日の道を一里ばかり跡もどりして左に入れば初鹿野山は朝風すゞしく旅人を迎へて立

ち。日川は右に流れて千古の調べを奏しつゝ伴ひ來る。草鞋に觸るゝは珊瑚の如き覆盆子。水晶の如き露。まだ日影に染まざるも潔し。

なほ一里行きて川をわたれば。小高き岡に天童山と額打ちたる山門あり。半くづれて算を亂したる石段の奥に古寺ありて景德院と云ふは。勝頼の墓ある處にて。杉林の陰には勝頼信勝の生害石といふも見ゆ。本堂に入りて寶物を見。茶など饗せられてこゝを出で。又一里の登にて肌着まで奪はるゝの苦行にかゝる。なほ日川の別を告げざるこそうれしけれ。

路のせまりたる處に折れまがりたる岩あり壁をなしたるあたりを。土屋總藏の片手切といふ。武田家滅亡の時。この岩陰に隱れ居て。寄せ來る敵を悉く切つて捨てたりと云ふ跡なり。その時の血しほ流れて此川水を三日染めたりとて。三日川と稱へしを。今





は東より流るゝとて日川とは改めしと聞きつるゝ。是なりけるよ。

のぼり終る處ゝ櫑盆の樣に凹みたる土地にて。二十戸ばかりの人家あり。木賊村と云ふ。村の最も高き處に寺あり大破して人住む處とも見ゆず。案内乞へども答へねば。戸を開きて内に入るに。なほ靜かなり。庫裏とも覺しき所の障子を明くれば。奥の方に一人の老翁。くすぶりたる土瓶の下に薪析りつゝくべ居たるが。いづこよりぞと云ふのみ。出で迎へんともせず。まづ東京より來れるよしを述べて。天目山とは何れを指すぞと問へば。かの翁はじめて古びたる座薄團を持ち出で。余が草鞋解きたるを見てさらば火鉢の側へと云ふ。いはるゝまゝ座をしむれば。說き出だして曰く。天目とは元支那の山の名なるを。當處の地形がうれに似たりとて。開山が此寺を斯くは名づけしのみ。今はうしろの岩山を

天目やまとは稱ふるなりと。淡泊に答へて勝頼の事に及ばず。なほ問へば曰く。かの勝頼がこゝに討死せしと云ふは虚説なりとも云ひ傳へて確かならず。田野の景德院も武田家滅亡後十年に建立せられしなれば。そこに生害石のあるもをかしきものなりなど。心なげに答へすてゝ。古くさき砂糖を匕もてすくひつゝ一つとて茶と共に勸めたり。思はざりき白雲深き所にて此抹殺塼士に逢はんとは。

しばらくして山中畫圖の板木を塵の中より持ち來れり。摺りたるは無きかと云へば。一二枚くらゐは摺りても參らせんとて。缺けたる硯ゑ土瓶の水をつぎ入れたり。されど刷毛の毛は大方脱ちて。紙は板木の面より小さし。如何するならんと見物しつゝ。携へ來たる辨當の鮓飯とり出だして二つ三つ彼翁にすゝめたるに。之を片手に受けつゝ板摺りにかゝりしが。毛なき刷毛にて塗





りたる墨は鮓飯を食ふ間に打ち乾く。やう〳〵塗り終りて紙を載すれば。板の面に飯粒のこぼれゐて妨をなすもいともどかし。余は紙を押へ。翁は其上を摩しつゝ辛うじて出來上りたり。勞力を思へば。鎌倉江の島などにて土産にもとむる寫眞は安きものぞかし。風は寒きまで吹きて火鉢のそばも猶立ちがたき程なれど。寶物は他の寺にあづけて無しといへば。茶の禮を述べて下りに向ふ。

夕方早く勝沼に歸りて猶一泊す。雨滴半夜夢を襲ひて。天目の山靈時々に來り吟ずるを覺ゆ。

二十二日晴れたり。朝出でゝ鹽の山を右に見つゝ松里村の惠林寺を訪ふ。信玄の菩提所とて境内ひろく樹木きよく。又おのづからの幽趣愛すべし。言ひ入るれば小僧先に立ちて信玄の靈屋や何やと案内しめぐる。老杉緑深き處英雄の魂魄寂として聲なし。

廊の半に椅子立てゝ茶菓を持ち來る。こゝゝゝ泉水を正面に受けたる處にて。ほゞはしりおつる波にゆらめく川骨の花。又塵外のながめなり。

寺を出でゝ暫く行けば。打ち開けたる川邊に出づ。笛吹川これなり。龜甲橋と云ふを渡れば飲食店氷店など岸に臨みて立ちならべり。こゝは昔は指し出でたる岩ありしによりて。差出の磯と稱へ。名所の一つなりしに。近年岩を削り道をつけ橋を渡したるが爲め。風光は減じたりといふ。車夫のゆく〳〵語るを聞けば。此國に昔し何の權三といふものありしが。其母いたく笛を好めり。權三は孝行深きものなりしかば。常に之を翫びて慰めけるに。或時あやまりて母は此川に溺死せり。權三歎き哀しむ事一方ならず。夜晝笛吹きすさびつゝ川邊を逍遙せしが。遂に思ひ餘りて身を投げて死しぬ。其時より笛吹川とは名づけしなりといふ。風ひやゝかにわたりて。水音今も咽ぶが如く又調ぶるに似たり。





此日は桑戸村の知人の家に暮らす。養蠶の物語を聞き製糸の工場を見るも亦銷夏の一學問なり。桑畑の風ひまなく通ひて繭の香ときゞに枕をめぐる。

二十三日。けふも同處にあり。甲府より來り訪ふ友ありて歌よめ扇書けなど攻めらるゝも徒然ならず。旅に出づればいつも書家らしく取り扱はるゝこそ可笑しけれ。夜に入る頃より鵜飼を見んとて昨日の差出に遊びしに。時刻の都合は。遂に見る事を得せしめずして止みぬ。月暗く浪白くさはいへど面白き夜のさまなりけり。

二十四日。今日こそ聞き及びたる。甲斐の御嶽に登らんとて五時に桑戸を立つ。桑戸より甲府へ二里。甲府より御嶽まで三里二十町とは云へど。謂ゆる甲州一里とて他の三里半に比ぶれば十二

分なる路のりあり。途に酒折宮に詣でゝ甲府を過ぎ。燒砂の上を吉澤に着きたるは十一時頃なるべし。草鞋駝菓子などならべて賣る家に立ちより。何か食ふものありやと問へば。老婆横柄に無しと答ふ。されど何をがなと見まはしつゝ。丼鉢に氷のあるに目をそゝぎて。さらば氷水を呉れよと云へば。赤砂糖をコップに入れ。其溶けて流れしを出だすあり。氷碎きては賣らずやと云へば。碎いて下されとて。鐵鎚と針とを持ち出で客に渡すも可笑し。こゝにて草鞋を求め。表衣帽子まで殘らずかの老婆に預けて。車夫を案内としつゝ。登りにかゝる。滿山の草木とく〳〵く反射して熱度の強きと言ふべからず。荒川を渡り岸に沿ひつゝ。入るといよ〳〵深うして路いよ〳〵嶮しく。世間まず〳〵遠うして山まず〳〵奇なり。川を隔てゝ見る山。すべて怪巖珍石ならぬはなく。頭に墜ちて仰がるゝ山。みな靈体妙骨ならぬはなし。倒れんとして





踏んばりたるが如きもの。崩れんとして支へられたるが如きもの。天を摩し地を蹂躙して一々名狀すべからず。石門を過ぎて猶しばらく行けば橋あり。川を又渡りかへさゞるべからず。遠く望めば朱欄虛空に懸かりて一幅の仙界圖を披くが如し。近づきて渡らんとするに。こはいかに。桁は軒の如く傾きて踏めばゆらめき。欄干にとりつけば衝立などを動かすが如くゆさ〳〵と打ち動く。それだにあるに。一間半ばかりの間は板おちて。朽ち殘る骨の上を傳はずしては渡られず。案内の車夫は猿の如く輕々とわたりゆきてこちへ〳〵と招く。一足踏みかけては見たれど。例の肥大のそれがし。あぶなくて渡られそうもなし。一歩もし過たば身を千尋の下に碎きて。其失ふところ豈案じかけたる歌の下の句くらゐにして止まんや。身は逃ぐるやうに跡しさりして遠路と聞く方の山越にかゝれば。車夫は又しぶ〳〵に跡もどりして

従ひ來る。是は其川上の淺き瀨を渡りて同じ方向に出でんとする道なり。かの危き橋のかなたには仙峨瀧ありて千古の樂を奏し。通天門ありて神仙の友を待つ。是も見のこさじとて川向を又もとの所に取つて返し。それより更に同じ川づたひして猪狩村を左になし。車夫かひ〳〵しく先に立ちて。草深き道を左に折れ右に曲りつゝ行く。足は碓の如く汗い湯の如し。車夫の笠は草葉の末に失はれぬ。然れども御嶽らしき山影は見ねず。

辛うじて到着せしは三時なりき。社は村の奥にありていと高き石段の上に位置を占め。欝蒼たる神木。巍々たる神殿。まづ仰ぐにも濁世の妄念を離れしむべし。石段を登ること半にして左の方ゑ旅籠屋あり。某亭とか某樓とか云ひし。今思ひ出さんとするゑ能はず。そこに腰打ちかけたる時の心は何ものにか譬へていはん。今朝五時に食事せし以來。疲れと暑さとに攻められつゝ。十時





間の後始めて飢を救はんとする塲合に出逢ひたればなり。主人曰く。めしあがるものは名物の蕎麥あるのみ。されど今から打ちて參らせんには少し手間が取れ申すべし。先づお茶漬にてはいかゞにやと。さらば茶漬も出すべし蕎麥も打つべしと命ずれば。暫くして飯來る。忽ち一杯を盡しぬ。然れども蕎麥こそ目的なればとて。待てども〳〵影見えず。清風ひやゝかに吹きて心地よき事限りなし。遂に疲れと涼しさとは我を導きて華胥に入りぬ。五十年の榮花果して何れの處ぞ。呼び覺まされて驚き起くれば。蕎麥は既に運ばれて枕邊にあり。粟飯ならざりしこそ殘念なれとて。急ぎ箸をとる。目に觸るゝ山。耳に當る風。忽にして冷氣肌を侵すの天地となりぬ。

社頭に參詣して境内を見めぐれば。結構の莊嚴なる。更に目を驚かせり。殊に古色の愛すべきあるは神樂殿の彫刻とす。牡丹は雨

に洗はれても紅いまだ衰へず。龍は虫に侵されても雲に猶吼ゆるが如し。顧みれば夕陽すでに姿を隱して。老樹の谷に影を引くあるのみ。それも忽ちに消えて。日ぐらしの聲頻りに呼應するを聞きつゝ下りに向ふ。足また重きこと鐵履を着けたるに似たり。」

猪狩村より馬を雇ひて行く。今ぞ始めて身の安きを得て。見かへす岩山。見おろす岩川。彼も捨てがたく此も忘れがたし。やう〳〵に黑くなりゆく谷陰。見る〳〵薄く消えゆく夕空。すべて物さびしき深山路の暮なり。時々に馬をとゞめては草を食ませ水を飲ます。涼風鬢を拂うて覺ゑず吟情を發せしむるもしば〳〵なりき。初更月を踏んで吉澤に着けば。老婆出で迎へて今夜はお泊りかと思ひしなどいふ。馬は別れを告げて山に歸り。我は車に乘りて里に向ふ。馳れし蹄の音は聞えずなりぬ。再び炎熱の世界は迎へ來りぬ。車輪も夢を破る能はずして。知らざりき甲府の町に入





りしを。柳町の佐渡屋に着きて。時計を見れば十時も三十分すぎたり。今夜は蚊軍の襲ふも知らず。まして隣室の喋々たるをも覺ゑず。

二十五日。甲府の町を散歩し公園など見て遂に車を躑躅ヶ崎に走らす。武田の古城を訪はんとするなり。馬鈴薯の花さく處は少し凹みて堀の跡を殘し。犬葡萄の蔓這ふ方は稍や高くして壁の形を留めたるのみ。蟬の聲藪の色。いづれ武田氏遺愛のものぞ。英雄の事業も天地の無窮に比ぶればあはれなるものなり。

圓光院の寶物を見。信玄の墓を吊ひなどして。正午佐渡屋にかへり。午飯を終りて馬車に乘る。二時も過ぎたるべし。瘦馬破鞭。砂烟を天に漲らしつゝ鰍澤さして行く。日い炎威を逞しうして吹き來る風こと〴〵く熱を送るに似たり。砂燒け石燃えたる釜無川を渡り。先づ小室の妙法寺にのぼる。右のかたに當宗の學林あ

りて。百間の廻廊に數百の提灯をつるしたるも他宗とかはりて賑はし。谷を隔てゝ左の山上に法論石と云ふあり。むかし日蓮上人と此寺の日傳上人と法力を爭ひし時。日傳は大石を虛空に飛ばし。日蓮は之を虛空に留めて動かさゞりしより。彼つひに屈伏して弟子となり。此寺を法華宗に改めたりと言ひ傳ふる名所なり。

薄暮鰍澤の上田屋に着す。月淸し浴後樓上の椽側に出でゝ且つ吟じ且つ飲む。宿帳を見れば。四五日前に泊りし客の中に。友人の名を讀み得たるも興あり。

廿六日。四時半の一番船に乘りて。富士川を身延に向ふ。此間六里。四時間にして達す。愉快限なし。舟は柔かなる板にて作り。岩に觸るれば自在に撓みて。之に碎くる憂なきやうに出來たり。舟子三人櫓を列ねて漕げば。淺黃の幕の下には乘客肩を摩しつゝ膝を交へて雜談す。金剛杖に笠結ひ添へたる道者あれば。風呂敷包に枕して居眠をする商人あり。漫遊の官吏は歸京の書生と無言にして舟の急流を行く毎に微笑するのみ。

川は流を呑む毎に水いよ〳〵加はり。巖を撲ち石に激する毎に勢いよ〳〵急なり。舟子は棹さしのべて之を避くる。恰も道に當る木片を押しのくるに似たり。女は目くるめくといひて伏し。男は拍手して快と呼ぶ。むかし淸少納言が『こゝろゆくもの』の中に『川舟の下りざま』を數へ入れたるも宜なるかな。

波木井よりわかりて一里のぼれば身延なり。總門を入りてやゝゆけば町あり。左右に旅人宿の看板を見る。余が取り得たる宿は田中屋とぞ云ふ。

主人出でゝ寺の案内せんといふ。さらば賴むと伴はれ行くに。先年の火災以來すべて小さくなりたりと聞けど。猶わが目には壯

嚴ゝふばかりなし。寺の玄關より入りて廊下づたひしつゝ見めぐるに。白衣を着たる僧の幾十人づゝも群をなして。往くあり來るあり。又部屋に居て經を諳んじ詩を吟ずるものありて。寺内おのづから賑はしきは。かの太鼓の響き。經箱の光と共に。當宗の榮花を表はすに似たり。

釋迦堂を拜して祖神堂に至る。佛前の裝束華麗壯大なること更に目を驚かせり。聞く此裝束ゝすべて東京魚河岸の寄進にかゝると。佛常に殺生戒を說く。而して今この腥き奉納を受く。さても前後衝突ゝ俗界のみに非ざりけり。

案内者曰ふ。御開帳をなされずやと。固より希望する處ぞとて其手續を賴めば。僧二人やがて來りて火を點し經を誦し。暫くありて扉を開く。余はかねて本堂に集まりゐたる老婆連の道者に沙汰して。お開帳拜めよといへば。二十人も三十人もどや〳〵と詰めよせ來り。余を中に取り込めつゝ禮を述べ扉の開くるを今や遲しと待つ。法華經を披き持ちたる祖師の嚴容は現ゝれたり。題目の聲ゝ余が左右前後より湧き出でたり。汗臭きには驚きたれども。余が題目の代理して呉れたるは謝すべし。彼等ゝ隨喜の涙を浮めつゝ一々余を拜して去る。實に三十五錢の開帳。その功德をなしたる幾許ぞや。

骨堂や何やと見るだけの處は見終りて。すゞしき處よて茶などの振舞はる。山氣肌を侵して風色秋に似たり。

寺を出でゝ西谷を見おろしつゝ下る。杉綠なる處に玉垣の白くめぐれるは。上人かつて讀經せし跡なりといふ。かの『身延』といふ謠曲に作れるは此處にての事なるよ。宿に歸りて先づ親しまるゝは枕なり。下婢の來て障子しむるも憎からず。ケットを掛くるも邪魔ならず。さても昨日の汗は何れの處ぞ。

夜に入りて窓を開けば。山月青うして清淨界を照すを見る。散歩せんとすれども足進まずして。徒に空房を守るも亦旅の一興なり。近くは隣室に達者自慢の女行者ありて。我に語學の材料を與へ。遠くは上の寺に清正公の大信者ありて。太鼓の音を絶やさゞるを聞く。それもやうやく靜まりて天地寂たり。たゞ山風の雲を吹くあるのみ。

廿七日。大野といふまで下りて又富士川舟に乘る。砂白く水青き處を一直線に矢の如く突き進むさま。何ものゝ快か之に比せん。急流迎へて呑まんとすれば。舟は忽ち後へにあり。我舟觸れて破れんとすれば。巖は忽ち艫に立てり。かの竿一たび過たば舟は水中に葬らるべきにと。手に汗しつゝ顏色失ひし婦人の有るもことわはり馴れて危きを知らざるは獨り舟子のみなり。

今日の舟は一番舟ならざるが故に。途中の飛乘りと飛上りとを





許すこと度に過ぎたり。されば隣村の祭にゆく少女。親類の法事にゆく老婆など。日傘をおらべ重箱を提げつゝしバ〳〵上下す。いとうるさし。

顧みれば身延の山遠く行客を送りて青天に聳え。眼を轉ずれば富士の高嶺近く舟人を迎へて白雲を出でたり。大野より岩淵まで十二里の道。半は盡きて樂しみは未だ央ならず。袖に散る波。髮を吹く風。かれも友なり此も友なり。

二時岩淵よ着きて停車場前の谷屋に休む。下婢茶を持ち來りて曰ふ。十二時の滊車は過ぎたれば最早三時五十分ならざるべからずと。先づ飯を命じたり。湯にも入りたり。浴衣のまゝにて欄干によれば。左には近く富士を望み。裾野の綠呼べは響ふる如し。それに續きて愛鷹山。又その右には箱根なるべし藍色に霞みて見ゆ。前は青田を隔てゝ松原ごしに海あり。帆影涼しく打向ふべし。

此好風景此美山水。つひに我を留めて夜瀛車を待たしむる事となれり。酒醒めて枕もとに手帳を探れば。先づ浦風ゝ命に應じて來り侍するが如し。

二十八日。午前二時五十分の瀛車に乗る。窓にもたれて眠る人。カバンに額を付けて眠る人。夢さま〳〵の世の中なり。やう〳〵に松原見え富士見ゆ。夜は明けんとするなるべし。國府津に着けば新聞々々と賣り來る。何ぞと問へバ時事新報といふ。暫く別れし東京に早や着きたる心地するも。開明のめぐみなり。新聞をくりかへし又くりかへす。横濱は來りぬ。旅路も僅かに一時間を餘せり。

二十七年

## 鹿隈川

長野縣は教育の盛なるところなり。今年も六月の末に蠶休みあるを利用し。北佐久郡に講習會を開かんとて。余に國語の講師たらん事を依頼し來る。よりて廿三日の一番瀛車に上野より乗りてみたり。

田の畔ゆきかふ村人に傘をさゝせたるは。昨日より催したる空の結果なるべし。手をいだして受け試むれば。霧のやうにふりかゝりて。今ぞ窓の硝子にも匕の形を畫がきいだす。車中の炎熱を救ふめぐみは二の次として。植附時におくれんとせし民の喜こそおもはるれ。

人ゝ新聞よみつかれて眠るもあり。過日の地震はいかにとて安政のむかしがたりなぞするもあり。我は窓より半ば顔をいだして山と語り野と語り。自然と共に吟じ自然と共にあそぶ。

十一時すぎて横川につきぬ。雨いよ〳〵強し。碓氷は雲につゝまれて眼前よせまれり。是より忽にしてくらく忽にしてあかく。ト

ンチルを幾たびも出で入りすれば。輕井澤なり。人のよく避暑にくる處なるこそことわり。俄に肌寒きを覺えたり。やゝ下りに向ひて御代田に着けば。郡書記伊藤龍雄氏まち迎へていざ人力にとすゝめらる。伴はれて岩村田までゆき。篠澤といふ家にて午飯す。此家の庭には梨子を多く作りたるが。茂りたる葉の中より鈴の如き實のつや〳〵と下りたるも心地よきに。又茱萸の大木ありてしだるゝまでに赤く熟したるは。更に目を喜ばしむ。これらの中にまじりて小指のさきほどの大さなる青き實を何ぞとへば。杏子なりといふ。わが東京にては既に熟して市に運ばるゝ頃よとおもへば。時候のちがひは知られたり。なほおもへばけふ過ぎつる道にて。高崎あたりより近づくに從ひ。あからむ麥を刈りいるゝとて。畑ににぎはふ里人を見たるも。その一つなり。東京近傍にては既に二三十日もあとにすみたるものを。





こゝより二人曳にてむつかしき石みちをゆられながら。夕かた望月の内田屋につきぬ。道のりは御代田より四里あまりとぞ。伊藤氏なほ今夜もこゝにありて萬事周旋せらる。

浴罷み飯をはりて欄によれば。山影水音すべて世をへだてたる心地す。雨さびしく暮れて山寺の鐘近くひゞき。旅情おのづから秋に似たり。

二十四日空はれたり。伊藤氏に導かれてゆく〳〵見るに。此地は鹿隈川の南岸に沿うて町をなし。川を隔てゝは城山と相むかふ。町は巽より乾に長くして民家三百戸に滿ち。警察分署あり裁判處出張所あり。料理店なぞ筆ぶぞにしるしたる家もあり。鹿隈川は南のかた蓼科山より來りて東西に折れ又北して末は千隈川に入る。町の半より此川を渡りて青田の中道を眞直にゆけば城山の麓に寺あり。その本堂今は借られて土地の高等小學校とな

り居れば。此にてぞ講習會は開かれたる。郡内の教育家すべて八十人。その遠くして通ひがたきは來りて町内に滯在し。通學する人々も遠きは二里半の道を日々往來すといふ。あはれ此篤志と勉強とを。東京の下宿屋にあつし〳〵とうめきをる書生たちに聞かせなば。何とかいふらん。鐘鳴りて講義はじまれば。聽衆一同暑さの何たるも覺えず。後ろの山の山おろし時々に來りて滿顏の汗を拂ひがほなり。伊藤氏は辭して岩村田にかへる。

正午すぎて家にかへれば炎威室を侵して東京にも讓らず。筆硯浪藉おもふがまゝの事かきちらして。僅に風呂の湧く時刻を待つのみ。

今夕あたらしき蕨の膳にのぼるあり。是は蓼科山に採りたるにて。其時節には人々桶と鹽とを携へゆき。山にて直に漬けかへるを習とす。かくすればいつまでも青々として風味なまなる時に

おとらずといふ。誠にしかなり。

二十五日午後一時すぐる頃大雷雨あり。しばらくしてをさまりたれど空なほ晴れずして小降ながら降りくらしぬ。東京より新聞の來るを見れば。朝鮮の事いよ〳〵切迫し。山地少將兵を率ゐて發せりと傳ふ。人間の霹靂を聞くも亦近きよやあらん。

二十六日また雷雨あり。人來りて萬事田舍の不便さにはさぞ困り給はんといふ。否々しからず。我牛込の宅にては魚肉を得んと欲してあたはざる事しば〳〵なるに。此里に來りし以來三度の膳に魚を欲く事なきは。いかに望月の開けたる證據ならずやと曰へば。客わらひて去りぬ。家ある妻子も之を聞かば旅はうきものとも思はざるべし。

二十七日夕かたより八十人の講習會員に招かれて某寺に至る。郡長鳥居義處氏も遙に岩村田より來り會せり。鮮なる川魚肥え

たる野菜。おもひもよらざる佳肴に飽きて盛なる地方の教育談を聞く。當地に來りし以來の大快事なり。余に一場の演說をと請はるれども。もとより不得手の藝なればやう〳〵の事にて斷りたるに。酒たけなはにして又先生の有名なる謠を聞かんといふ人あり。此園をも先づ切り拔けて寺をいづれば。時まさに黃昏。烟あはく迷ひて里の火影ちらつきそめたり。

二十八日高等小學校長佐藤寅太郎氏來りて茱萸の大枝を贈らる。即ち花瓶にさして對座しつゝ茶を呼べば。少女來りて東京の書信を傳ふ。あはれ家なる子供らに此實の赤きを見せましかば。」夜に入れば當地滯在の人々に誘はれて。螢見にもく。夜町をあるくゝはじめてなるが。函館氷といふ提灯を揭げ西洋酒などならべたる家あり。如何なる客か立ちよるらんといへば。講習會員をこそ待ち居るならめと人々笑ふ。



町を東へ出で離るれば鹿隈河に渡せる橋あり。望月橋といふ。こゝはわが此地に入りたる時。車にて過ぎたる處なれど。夜の景色はまた格別なり。橋の半に立ちて見れば。水上の方なる森のあたりより。小さき子供が手に〳〵盆提灯など點じつゝ出で來るかとおもはるゝさまして。三つ五つ四つと光を放ちつゝあらはれ來る。東京の市にて見るものよりはいと大きにて。飛ぶさまもいそがはしげあらず。土地にては此大きなる種類を山吹といふとぞ。やう〳〵近づきて袖を掠め。橋をくゞりては水におち。岩にふれては空高くゆく。星にあらず露にあらず。いかなる詞もちてか之をたとへん。月なき頃の山影いよ〳〵すごく。下ゆく水のひゞきます〳〵高きにかれは其間を松明の如く漁火の如く。照らしては又しめる。夜はやゝ更けぬ。橋ゆく人は更になし。天地寂寞たゝ我等が談笑の聲を山彥にのこすのみ。

廿九日けふは講義をはりたる後山邊村の津金寺を訪はんとて。二十人ばかりの同勢にて出かけたり。望月町をはなるゝところの小高き岡に大伴武以を祭れる社あり。これは式内の社にて木立ものふりいと神さびたり。まづ之にまうでゝ。青木坂。茂田井村。芦田村など打ちすぎつゝ中山道を一里半ばかりも行きて。笠取峠にかゝる前より右に少し入れば。山邊村に出づ。今は三箇村を合せて横鳥村の稱を用ひたり。津金寺は山のふもとに位置をしめ。山號をば慧日山といひ津金寺の文字は土人よみてツガネイジと呼ぶ。行基菩薩の開基にて。昔い三十六坊軒をならべたる寺なり。建築さほど壯嚴ならざれども古色掬すべく。先づ大門の仁王二体は我心にかなひたり。うしろの山に望月家三代の古墳あるを。蜘蛛の巣うち拂ひつゝ見れば。承久の文字をば無情の苔も埋み殘したり。寶物を見ばやと寺にいひ入れたれど承諾せざりしを。人々の周旋にて村總代檀家など立會の上つひに秘庫の錠を開かしむる事となる。あはれ是等の人々こゝまではるゞの道を炎天にやかれつゝ案内せられしさへあるに。今また寺より半道にもあまる村役場に往復しつゝ此勞を取りたる深情い。永く記憶に存して忘れざるべし。寶物は兆殿司の筆なる羅漢八軸。禪宗開山の像。涅槃の大幅。信玄の遺書類。源空自筆の阿彌陀像などなり。涅槃の圖は李龍眠とも傳へたりといへどいかゞあらん。

かへりは道の半より暮れたり。墨畫の山影われをとりまきてもの凄きに。螢こゝかしこ飛びみだるゝもおもしろし。

三十日。里人に案内せられて川向なる城山の絶頂にのぼる。小松ところ〴〵生ひたるかげに蕨の丈のびたるはさながら暮春のけしきなり。風ゆるくふきて鶯の聲雲雀の聲こゝかしこに聞ゆ。

のぼりつめたる處は平らかにて此を富士見臺といへるは。時により遙に望まるゝ事あればなるべし。一望のもとに集まるは北佐久郡の原野にて。之を佐久だひらと呼ぶ。先づ東の方には青田の遠近に散在せる村々一々指點すべし。淺間の煙高くのぼりて近く眼にあたるも愉快限なし。

七月一日。あすは出立せん名殘とて當町滯在の人々に招かれ河内屋といふに行く。酒闌にて議論わき歌聲おこる。膝をまじへて歡語するも今霄かぎりとおもへば感おのづから愴然たり。請はれて短冊扇面唐紙など筆にまかせつゝ書き散らす。酒さめたらばいかに恥かしき歌こそ多かるべきを。いはるゝまゝに書家きどりになりすましたるもわれながらをかし。人間萬事氣樂なるは旅なるかな。

七月二日午後二時に望月を立つ。講習會員炎天の道を遠しとせずして名殘をしげに送り來る。

望月の影にわかれて鹿隈川
わたるわれこそかなしかりけれ・

或は半道一里二里とおもひ〳〵の處にて別れゆくも又いつかはとあはれなり。千隈川をわたりて中津村といふより車に乘る。同じく岩村田まで行く人々と共に八人。燒砂を身にかづきつゝまだ日高きに此度なじみになりたる篠澤に着きぬ。伊藤佐藤川田山室の諸氏は今夜も來り會して萬事ねんごろに我を遇し且つ饗せらる。あゝ此深情に別れんとする明朝は近きにあり。氣笛一聲碓氷を隔てゝ我は雲外の人とあらざるを得ず。

新文林下卷　終

明治廿六年十二月廿五日內務省許可
明治廿七年十二月十二日印刷發行

定價金拾貳錢

編輯兼發行者　大橋新太郎　日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　野村宗十郎　京橋區築地一丁目二十番地
印刷所　株式會社東京築地活版製造所　京橋區築地二丁目十七番地
發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

版權所有

京都同志社大學教授松浦政泰君著

## 應用文章學

全一冊洋裝
大判美本
正價拾二錢
郵稅四錢

本書は著者腹筒富贍の文思により文章作法に關する方法を平民的美文趣味に面白く親切に說明したるものにして其例證する所日本古今の有名なる和歌、詩文等數百を網羅し其好む所を擇ばしむ殊に著者が學生教授の經驗より得たる便宜なる新法に因て說明したるものなれば文章に志ある人は勿論學生諸君には溫かなる同情を得べきなり。

大和田建樹先生著

## 應用歌學

全一冊洋裝
大判美本
正價拾五錢
郵稅四錢

世に和歌の作法を敷ふる書多しと雖も、其簡便にして興味を備へたるは大和田先生の應用歌學なりとす。如何に初心なる少年子女と雖とも、讀んで解し易く試みて實益あるは、大和田先生の應用歌學なりとす。卷中載する處數十條、作歌訣あり、思想言語の撰擇法あり、題詠心得あり、文法入門あり。而して最後に實修の法を擧げ、先生が門生の詠歌に、添削批評を加へたる實例を示し。更に古人大家の作品に就きて、其妙處を指摘せられたり。苟くも歌學に志す方々は、讀んで歌の歌たる所以を辨明し給へ。

大和田建樹先生著

## 應用和文學

全一冊洋裝
大判美本
正價拾五錢
郵稅四錢

「こそ」「けれ」「なん」「侍る」の源氏文。美は美なりと雖も普通文は之にのみ偏すべけんや。「夫れ」「此れを以て」「所以なり」の外史文。妙は妙なりと雖も普通文は之にのみ傾くべけんや。此の一柔一剛の兩極文躰を折衷し。謂ゆる通俗文標準を定めん事先生が年來熱心に研究せられし所なり。今應用和文學の出でたるは。蓋し此持論と研究の結果とを世に公にせられしのみ。請ふ見よ先生が平易の文躰は其理想の在る處を明にせし者なる事を。

菊醉山人羽山尙德君著

## 初等教育 作文眞訣

全一冊洋裝
正價拾二錢
郵稅四錢

文章は人たるもの學ばざるべからざるの要道たり此書部門を讀書、文法作例、文字、文話の五種に分ち而して門中又數種の小部類ありて其要道たる文章を作る方法を敎ふる事極て正格に極て平易に極て懇切にして恰も老翁の兒孫を指道するが如し斯の道に志すもの宜しく一讀して其眞訣を語るべし

# 大和田建樹先生著

# 國民文庫

## 全部出版完成

全部十二卷 洋裝美本
正價一冊(二百頁)拾二錢 全部十二冊金一圓廿五錢 六冊金六拾七錢 郵稅一冊四錢ッヽ

國民文庫は、明治廿七年に於ける、文學の新天地を開闢するものなり、國民文庫は、明治廿七年に於ける、新体歴史の開拓に奮つて鍬を執るものなり、國民文庫は、明治廿七年の新社會は、又將に既往廿六年の舊社會にあらざらんとす。實に此活動社會と共に一新すべき、文學世界の風潮を卜知すべきは此書あるのみ

### 本書總目次

第一編 歐米名家詩集 上卷
第二編 歐米名家詩集 中卷
第三編 歐米名家詩集 下卷
第四編 文學遊戯 全
第五編 新體日本歴史 上卷
第六編 新體日本歴史 下卷
第七編 新體萬國歴史 上卷
第八編 新體萬國歴史 下卷
第九編 英米文人傳 全
第十編 明治文學史 全
第十一編 新文林 上卷
第十二編 新文林 下卷

---

宮中顧問官學習院々長田中光顯君題辭
學習院音樂教官納所辯次郎君
高等師範學校音樂教官鈴木米次郎君編纂

# 明治軍歌

全一冊洋裝大判 正價拾二錢 郵稅四錢

### 本書目次 曲譜入

君ヶ代・皇旭旗・日本男兒・行軍歩兵・喇叭の響清・大和心・水兵・東洋の光り凱・正大和魂・日本刀・抜刀隊・連戰連勝・哨陣・此の戰ひ・鷹てや懲せや・御國の民・進撃軍旗・國旗・往け往け軍・艦・龍の旗・火砲の雷・日本男兒・招魂社・大皇國

本書に掲くる所の軍歌は皆是當代名家の作國民公憤の大聲なり今之に合するに抑揚巧妙なる曲譜を以てす忽ちにして萬馬嘶き忽にして劍光閃く眞に是れ小學生徒の軍歌教科書としては尤も適當なるもの忠君愛國の情勇壯快活の氣激發して火の如く花の如けん

---

森田思軒先生序文 湯淺吉郎先生唱歌
巖谷漣山人編 水野年方君畫

# 花咲爺

全一冊洋裝 正價五錢 郵稅二錢

日頃愛育せし犬に教へられて數多の小判を堀出し、臼からは餅か湧出る、果ては枯木に花咲爺の名譽をしめて富貴安樂の長者となるも、隣の爺の犬を殺し臼を碎きて遂に殿樣に縛らるゝも、心一つの曲直より起れる話、世の中の事は實以て斯の通り、讀みて家庭の修身書にも供へたまへ、

---

泉鏡花君著

# 海戰の餘波

全一冊和裝 正價拾錢 郵稅二錢

松枝海軍中尉が見果てぬ海の外に船出してより一千千代太は父の雄々しき性を受けて波風怒る海の上に男女泣き叫ふ難破船を扶けつめ田り〳〵て支那船の虜となりて日本男子の氣象を顯はしあるは龍宮に遊びて清兵に讐を報ひ、あるは父海軍中尉との對面、夢に似て夢ならぬ海戰の餘波に湧き來れる海國少年の譚之をよめば壯快淋漓劍舞百回せん

宇田川文海君著　彩色密畫挿入

# 契冲阿闍梨

●全一冊和裝　正價拾二錢　郵稅四錢

禪學の大智量文學の大見識をそなへて國主に敬慕せられ一代に尊重せられたる契冲阿闍梨の品性、見識、德望、功績を描くに文海氏が穩秀清麗なる筆以てし殊に其材料は著者自ら圓珠庵なる契冲が草庵につきて考證摸寫せしものなれば一讀恰も阿闍梨に接するの想あるべし

江見水蔭君著　武内桂舟君密畫

# 加藤清正

●全一冊和裝　正價拾二錢　郵稅四錢

加藤清正は非常の勇將にして又非常の忠臣義人なり純正なる日本人の最良なる摸範なり今水蔭子の警眼と奇筆とを以て十分に其心胸面目を發露す文章平易奇趣湧くが如く少年文學中出色の文學なり今日征清の我が海陸將士中果して何人か清正を匹似するや本書を讀みて商量せば限なき興味あらん

## 少年文學總目次


第一編……こがね丸
第二編……二人むく助
第三編……今辨慶
第四編……維新三傑
第五編……雨の日ぐらし
第六編……寶の山
第七編……二宮尊德翁
第八編……姉と弟
第九編……當世少年氣質
第十編……親の恩
第十一編……紀文大盡
第十二編……大石良雄
第十三編……暑中休暇
第十四編……近江聖人
第十五編……河村瑞賢
第十六編……甲子待
第十七編……太閤秀吉
第十八編……德川家康
第十九編……俠黑兒
第二十編……陸奥の長者
第廿一編……新太郎少將
第廿二編……賴山陽
第廿三編……上杉鷹山公
第廿四編……菅丞相
第廿五編……日蓮上人
第廿六編……五少年
第廿七編……二代忠孝
第廿八編……平賀源内
第廿九編……高山彦九郎
第三十編……寧馨兒
第卅一編……加藤清正
第卅二編……契冲阿闍梨


定價　一冊（百六十頁）金十二錢●十冊前金壹圓拾錢●卅二冊前金三圓三十錢●郵稅一冊金四錢●每編名家の彩色口繪挿入